

戦後最長政権の未公開官邸資料

オンライン版

楠田實資料

(佐藤栄作官邸文書)

編集：和田純 神田外語大学教授



佐藤首相と楠田首席秘書官
(於官邸玄関)

戦後最長の佐藤栄作政権（在任期間：1964～1972）を支えた首席秘書官楠田實（1924～2003）が残した、未公開官邸資料。外交から内政まで第一級の極秘資料で構成される、事実上の「佐藤栄作文書」。

四千点を超える一大コレクションであり、今後戦後史を語るうえで不可欠な基本史料である。

出版・発売元：丸善雄松堂株式会社

楠田實資料について

神田外語大学教授 和田 純

1964年11月9日から1972年7月6日までの7年8ヶ月、延べ2,797日にわたる戦後史上で最長の政権となった佐藤栄作内閣。その総理秘書官を務めたのが楠田實である。

楠田は1924年に生まれ、少年戦車兵として従軍したあと早稲田大学へ進み、産経新聞で政治記者となって佐藤派を担当し、1967年3月1日に政治部次長を辞して総理秘書官に就任する。以来、佐藤退陣までの5年4ヶ月にわたって総理の首席秘書官を務めた。

本資料は、その楠田が2003年の逝去まで手元に残した数多の資料のうち、佐藤政権関連の文書を整理してデジタル化し、初公開するものである。文書総数は約4,460件、約9万ページに及ぶ膨大なもので、質量ともに事実上の「佐藤栄作文書」と呼んでよい第一級の資料群である。

本資料は内容的に次のように大別できる。

(1) 「Sオペレーション」とブレイン集団：「S」が佐藤を意味する通り、1963年12月から佐藤政権実現のために楠田を中心に水面下で活動した「忍者部隊」の活動が「Sオペ」である。佐藤が政権についた後も継続し、楠田の秘書官就任後は水面下と水面上の両者からなるブレイン集団へと発展していった。ヴィジョンを磨き、政権を生み出し、政策を立案し、政治を創り出していったジャーナリスト、官僚、文化人らの献策の軌跡をたどることが可能で、長期政権が内在的なブレインを必須とし、その要として秘書官が機能したダイナミズムを跡づけられる重要かつ希有な資料群である。

(2) 演説・答弁

楠田が心血を注ぎ、後年になっても自負していたのは、すべての国会演説と主要演説を自ら書き下ろし、すべての国会答弁の最終とりまとめをしたことである。そうした総理発言の構想を練り、推敲を重ねていく各過程の膨大なメモや草稿と、佐藤が最終的に使用した完成原本が含まれ、楠田の苦闘の跡とともに、様々な人々の献策や総理自身による加筆の跡を追うことができる。例えば「核抜き本土並み」を打ち出す際の確執など、政治の機微をたどる上で基本となる資料群で、官庁が用意した多量の想定問答集とあわせて、今日以上に国会論戦や「言力」がインパクトをもった時代の政治を象徴するものである。

(3) 日記・メモ・手帳・執務日誌

官邸で管理されていた「総理日程」に加えて、楠田自身が残した手帳や執務日誌、大量のメモが一つの資料群となっている。メモは産経新聞記者時代（池田政権期）、Sオペ時代、秘書官時代と継続しており、取材、面会、会合などの記録が生々しい。和田純編『楠田實日記』（中央公論新社、2001年）に未収録の日記も一部含めた。

(4) 外交資料

外交資料の中心はなんと言っても沖縄返還関連である。外務省と並行して官邸自らも返還交渉に深く関与した経緯が読み取れる資料群で、沖縄返還交渉を総体として把握し、冷戦下における安全保障を究明する上で不可欠な資料群である。加えて、ベトナム戦争、NPT、「非核三原則」、日米安保延長、繊維交渉といった山積する課題や、「ニクソン・ショック」となった米中国交回復、それに次ぐ日中国交正常化の難題などテーマは多岐にわたり、未公開文書、私的メモ、意見具申、草稿といった種々の資料が錯綜する激動期の記録としてきわめて興味深い。各国要人との会談録、米国大統領と交わした

親書原本、外務省の情勢分析資料、懇談会や有識者の見解なども幅広く含まれ、最大の資料群を形成している。

(5) 外遊資料

佐藤総理は2回の訪韓、訪台、2次にわたる東南アジア訪問に加えて、沖縄返還交渉のために訪米を重ね、ジョンソン大統領と2回、ニクソン大統領と3回の首脳会談を行った上、国連25周年の場でも演説し、さらに総理退任後にもニクソン再選就任式とジョンソン葬儀のために訪米している。こうした延べ11回にわたる外遊ごとに事前準備資料、発言要領、会談録、接遇記録、報道記録などがまとめて残されており、(4)を補完している。

(6) 内政資料

佐藤政権は、内政では、高度成長の歪みを乗り越えるべく「社会開発」を標榜した。住宅、物価、公害といった国民に直結する課題に取り組み、為替自由化という荒波にも遭遇したが、こうした内政・経済政策に関わる資料も多く残され、社会問題の解決を政府が主導する流れの定着が読み取れる。また、大学紛争からハイジャック事件まで世界を揺さぶった動乱にも直面しており、世界史上の転換点に日本も無縁でなかったことを想起させてくれる。のみならず、2度の総選挙と都知事選挙への対応、地方での「一日内閣」の開催、テレビ定例番組「総理と語る」の制作記録など、政府（官邸）と国民を繋ぐコミュニケーションを拡充しようとした軌跡も残され、「新聞記者は出ていけ」の一言で有名になった退任会見も含めて、政権とメディアの関わりもうかがい知れて興味深い。

(7) 「ノーベル平和賞」受賞関連

佐藤は1974年にノーベル平和賞を受賞するが、その際の記念講演を執筆したのも楠田で、文化人と共同起草した経緯や、佐藤との摺り合わせで「非核三原則」への言及がトーンダウンした経緯などをたどることができる。

(8) 楠田執筆の刊行物

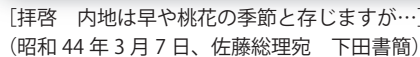
楠田という人物を知る上で欠かせない私家版の自叙伝『但盡凡心』、楠田が後年に佐藤内閣の思い出や位置づけを記した非商業出版の寄稿や講演録なども収録している。

政権が機能し、政治が大きな力を発揮するには、官邸こそがその中枢であることに疑いはない。しかし、官邸での営為の記録がまとまった資料群として公開されたことはこれまでになく、その実態は不明なままであった。その意味では、本資料の公開は先例のないもので、官邸の機能とダイナミズムを究明し、総理秘書官の役割を跡づける上で、現下では唯一無二のきわめて貴重なものだと言ってよい。

また当然、佐藤政権そのものを研究する上でも本資料は不可欠である。政権の命運を賭けた沖縄返還、不発に終わった日中国交正常化、有能な官僚や若手学者を起用したブレイン政治など追うべきテーマは多彩である。のみならず、左右対立の激動で問われた国民統合の課題、1970年代を見据えた時代認識と展望、「平和国家日本」の路線を集大成し「戦後レジーム」の集約点を築いたことの位置づけなど、切り口は豊富である。

政治というものの深層を探り、政権というものを当事者側から究明し、世界史の中に日本を跡付けうるものとして、本資料はまさに類例のない「宝庫」である。

気鋭の研究者による充実した解題



第Ⅰ節	「楠田實資料」の背景と全体像	和田 純
第Ⅱ節	Sオペレーションと総理官邸	村井 哲也
第Ⅲ節	国内政策	村井 良太
第Ⅳ節	沖縄返還・日米関係	中島 琢磨
第Ⅴ節	日中関係	井上 正也

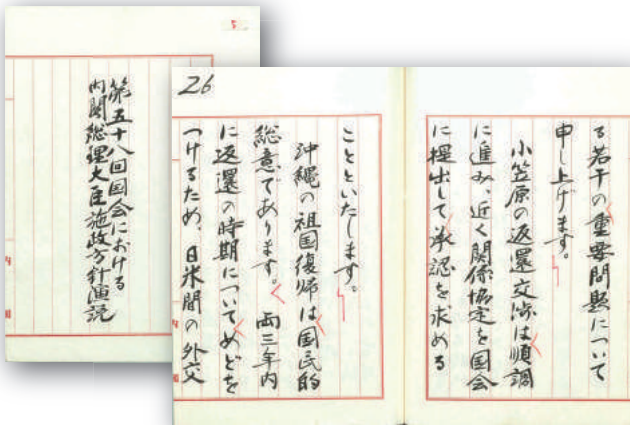


佐藤内閣期の官邸主導は官僚排除ではなく、むしろ外務省との連携を図りつつ首相の意向を交渉に反映させる機能を果たそうとしたことが窺われる。「楠田實資料」には、千葉一夫アメリカ局北米課（後に北米一課）長をはじめとし条約局、東南アジア局、国際情報部等から官邸に届けられた報告書、メモ類が含まれている。千葉課長は官邸に出向中の小杉照夫総理秘書官と同期であった関係から交渉の機微を官邸に伝え、外務省との緊密な関係構築に貢献した。佐藤ニクソン共同声明の作成に際してはヴィエトナム戦争終結の見通しをめぐり日米の合意形成が難航したが東南ア

「楠田實資料」からは沖縄返還交渉の機微について、官邸が政治の果たすべき役割を模索しつつ政官関係の構築に取り組む姿が窺われる。加えて日米京都会議、沖縄基地問題研究会などが提起した沖縄構想が明らかになったことも今後の研究進展に貢献することが期待される。既に公開された『楠田實日記』、『佐藤榮作日記』と併せて読むことにより、「楠田實資料」は 1960 年代から 1970 年代までの外交と内政について更なる新たな分析視角を提供することであろう。

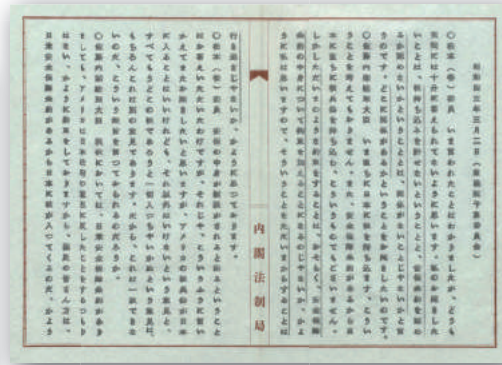
高度成長期日本の政治の実像に迫る、一級の未公開資料群

総理演説・国会答弁



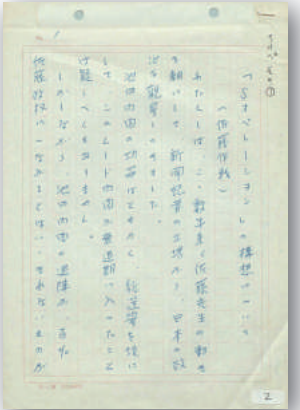
「第58回国会施政方針演説」（総理演説手元原本）

非核三原則



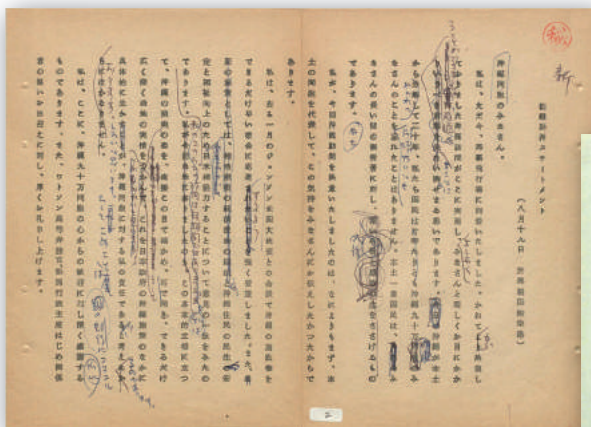
「三月二日の衆予における松本委員に…」
（高辻内閣法制局長官、沖縄の核と非核三原則の兼ね合いについての答弁案）

Sオペレーション

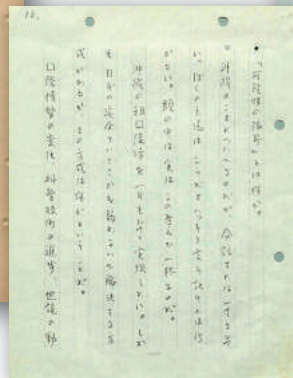


「Sオペレーション」の構想について」
（楠田寛の佐藤茂提言）

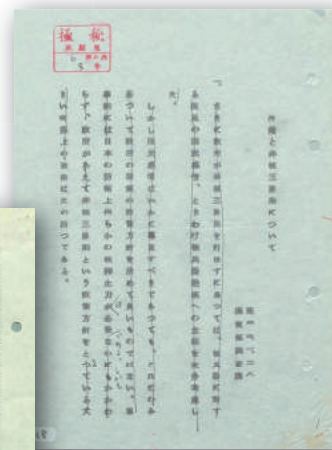
沖縄返還



「総理訪沖ステートメント」（八月十九日 於那覇国際空港）

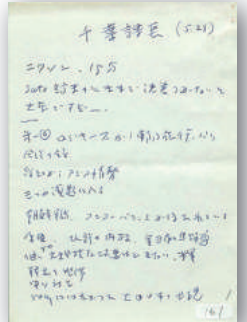


「ハーリー・F・カーンとの会談録」



「沖縄と非核三原則について」
（昭和44年1月28日、国際部調査課）

楠田メモ



「千葉課長」
（千葉北米一課長との打合せ）

佐藤政権の「ブレン政治」を映し出す一級の官邸資料

東京大学教授 牧原 出

「アメリカの NSC と一緒やな」と国際政治学者の高坂正堯は言う。何とも臨場感あふれる京都弁だ。「座談会 シビリアンコントロールについて」と題した資料の一節で、四次防策定の最終段階の頃。この内輪の座談会に登場するのは、官邸スタッフ以外に、政治学者の京極純一に加えて、今でこそ「護憲派」の憲法学者として知られる芦部信喜。互いに気心の知れた雰囲気の中、防衛問題を議論する。ここまで同時代の知識人を巻き込んでいたのかと改めて思われる。

政権発足前の「Sオペレーション議事録」も同様で、メモに当時の反体制派の有力知識人の名前が並んでいる。「社会開発」が名目以上に福祉国家路線を包みこもうとしていたことに改めて気付かされる。ハト派として知られた宮澤喜一もまた、佐藤派と対抗していた池田派ながらこのSオペに加わる。「一、宮澤喜一氏の件について…」と題されたメモでは、「宮澤氏は総理の知遇に感激しており」という宮澤の率直な感想の後、「宮澤氏を直ちに政策ブレンとして売り出すかどうか」

を今後検討していこう、とある。政権発足後の初々しさが見事に伝わってくる。1966年1月28日の総理大臣施政方針演説に向けて開かれた「勉強会速記録」ともなると、200頁を超える長大な記録だ。橋本登美三郎官房長官の議事進行で、秘書官や各省代表の官僚たちが談論風発。「若い者が聞いても、ちっともおもしろくない」というのではいけないという意見から、演説では青少年向けのメッセージが発せられている。橋本自身は、総理は「一歩先」の抱負を述べるべきであり、「それでしくじれば、総理はやめたらいいんだよ」とまで言い切る。自在なやりとりこそ、長期政権の基礎固めであった。大学問題では、衛藤瀋吉、高坂正堯、山崎正和など若手の大学人が次々と意見具申を行っている。

政策立案のために、最大限に知性を動員しようとしていたのが当時の官邸だった。知性と権力が交錯する様子を如実に映し出す資料集である。

政治の内部構造を伝える高水準の文書館

熊本県立大学理事長 五百旗頭 真

米国の豊富な公文書にもとづいて研究する楽しさを私が知ったのは1970年代のことであり、まずワシントンDCの国立公文書館に入り浸った。その後、歴代大統領の記念図書館を全米各地に訪ね、その政権のすべての関連資料が一堂に集っている便利さ、効率のよさを堪能することになった。

遺憾なことに、日本には首相図書館が存在しない。短命の政権はともかく、たとえば2年以上、せめて4年以上国政を担った首相については、記念図書館の設立を制度化すべきではないか。

それがかなわない中、実はこの楠田資料は、7年8ヶ月という戦後日本最長を記録した佐藤栄作政権についての信じ難いほど高水準の文書館を成している。

佐藤番記者であった楠田實は、武骨だが真面目な政治家佐藤に成長の伸びしろを感じ、立派な政治指導者に改造することを夢見た。楠田は自民党総裁選挙に立候補する佐藤の政策綱領づくりのため「Sオペ」を結成し、佐藤政権成立後は首席秘書官となり、米国ケネディ政権のブレーン政治をモデルに、社会の英知を集める新しいタイプの政府の構築を試みる。沖縄返還をはじめ佐藤政権のすべての重要な政策と演説は、楠田の手を通してつくられた。驚くべき丹念さで、そのプロセスすべての記録を楠田は残し、それは楠田本人と遺族によって編者和田純に託された。ここにわれわれはその恩恵に浴することができる。佐藤政権の重要な事跡の製造過程をつぶさに見ることができ、戦後史のどの政権にも不可能なほどの精密さをもって政治の内部構造を知ることができるのである。

Crucial material pertaining to the workings of the Sato government

Akira Iriye, Professor Emeritus, Harvard University
ハーバード大学名誉教授 入江 昭

Here is an invaluable collection, made available to the public for the first time ever, of an enormous amount of writings by Kusuda Minoru, secretary and advisor to Prime Minister Sato Eisaku, the longest-serving prime minister of postwar Japan (1964-1972).

Kusuda, a political reporter for the Sankei newspaper, left his post to work for Sato as his principal secretary during 1967-1972. He drafted virtually all major speeches that Sato gave in the Diet (Japan's Parliament), took notes at the meetings the prime minister attended, compiled material for his use as he prepared for diplomatic conferences (including

the Oslo gathering in 1974 where Sato was awarded the Nobel Peace Prize), and sought to facilitate communication between the politician and the public. In addition, the collection contains unpublished governmental documents in Kusuda's possession that have never been published. For instance, there is an enormous amount of documents pertaining to Japan-U.S. security relations, in particular the presence of U.S. military forces on the island of Okinawa.

Altogether, the documents provide crucial material pertaining to the workings of the Sato government.

オンライン版 楠田實資料（佐藤栄作官邸文書）

編集：和田純（神田外語大学教授）

解題：和田純、村井哲也（明治大学兼任講師）、村井良太（駒澤大学教授）、
井上正也（成蹊大学教授）、中島琢磨（龍谷大学准教授）

編集協力：宮川徹志（NHK チーフ・ディレクター）

セット特価 ￥800,000（税別）

URL: <http://j-dac.jp/KUSUDA/index.html>

プラットフォーム：J-DAC ジャパン デジタル アーカイブズ センター

完全買切型（ご購入後のプラットフォーム利用料、年間維持費用は不要です）

<1ヶ月の無料トライアル受付中、お申し込みは archives@maruzen.co.jp まで>

内 容 構 成

第一部

分売価格 ￥450,000（税別）

- | | | |
|-----------------------|----------------------|----------------------|
| A 総理演説・挨拶 | D 日米首脳親書 | F 外交（日米・沖縄返還・安全保障） |
| A-1 総理演説・挨拶（手元原本） | D-1 佐藤総理・ジョンソン大統領 | F-1 日米関係・沖縄返還・繊維交渉ほか |
| A-2 総理演説集・発言録 | D-2 佐藤総理・ニクソン大統領 | F-2 安全保障・沖縄返還・核・軍縮ほか |
| B 総理国会答弁 | E S オペレーション | G 外交（日中・米中ソ） |
| B-1 総理国会答弁案（手元原本） | E-1 会合記録・佐藤への提言・各種資料 | G-1 日中関係 |
| C 国会想定問答 | E-2 提言推敲記録・各種資料（簿冊） | G-2 中ソ・米中ソ関係 |
| C-1 国会答弁想定問答（冊子本） | | G-3 日中関係（刊行物） |
| C-2 国会答弁想定問答（テーマ別・課別） | | |

第二部

分売価格 ￥450,000（税別）

- | | | |
|--|---|-----------------|
| H 外交・内政（有識者意見） | J-6 第2次東南アジア・大洋州訪問 インドネシア・豪州・NZ・フィリピン・南ベトナム | K-6 大学問題 |
| H-1 国際関係懇談会会議録 | J-7 米国訪問 第2回佐藤・ジョンソン会談 | K-7 総理退任会見 |
| H-2 有識者の見解 | J-8 米国訪問 第1回佐藤・ニクソン会談 | K-8 よど号ハイジャック事件 |
| I 外交（全般） | J-9 米国訪問 国連25周年記念総会＋第2回佐藤・ニクソン会談 | K-9 その他の内政関連 |
| I-1 外交資料各種 | J-10 韓国訪問 朴大統領就任式 | L ノーベル平和賞 |
| I-2 海外要人の総理との会見録 | J-11 米国訪問 第3回佐藤・ニクソン会談（サンクレメンテ） | L-1 授賞記念講演ほか |
| I-3 『国際情勢資料』（外務省） | J-12 米国訪問 ニクソン大統領再選就任式・ジョンソン前大統領葬儀 | M 総理日程 |
| I-4 『国際情勢』『マスコミ論調資料』（内閣調査室ほか） | | M-1 日程簿 |
| J 外交（総理外遊） | K 内政 | Y 楠田記録 |
| J-1 総理海外訪問公式記録（刊行物） | K-1 国会演説関連 | Y-1 日記 |
| J-2 米国訪問 第1回佐藤・ジョンソン会談 | K-2 「一日内閣」 | Y-2 手帳 |
| J-3 韓国訪問 日米韓台四国会談 | K-3 テレビ番組「総理と語る」 | Y-3 メモ帳 |
| J-4 台湾訪問 佐藤・蔣会談 | K-4 総理発言・会見等 | Y-4 自叙伝・寄稿・講演録 |
| J-5 第1次東南アジア訪問 ビルマ・マレーシア・シンガポール・タイ・ラオス | K-5 政治課題・政策検討資料 | |

70 年代日本政治外交史の一級史料

大平正芳記念財団旧蔵

オンライン版

大平正芳関係文書

編集：小池 聖一 広島大学教授、福永 文夫 獨協大学教授



第 68・69 代内閣総理大臣をつとめた大平正芳（1910～1980）が残した膨大な文書群。大平正芳自筆の日記・手帳から、書簡、外務省や通産省などの官庁資料、国会答弁・演説用の原稿、選挙関係資料、さらには大平の回想録執筆にあたって行われた政財官の重要人物へのインタビュー記録など、膨大かつ多様な原史料で構成された、まさに戦後政治史の一級史料群。

出版・発売元：丸善雄松堂株式会社

宰相大平正芳の実像を映し出す重要資料

成蹊大学教授 井上 正也

大平正芳への評価が近年とみに高まっている。それは大平の政治家としての経緯や国際的視野を再評価する以上に、安倍政権への対抗軸となりえる自民党の「リベラル保守」の理想を大平に仮託する流れにも後押しされているように思える。

しかし、我々は政治家・大平正芳を果たしてどこまで知っているだろうか。「保守本流」や「リベラル保守」なる多義的な言葉に込められた政治理念を一身に背負わされた大平も、宏池会の祭司であった伊藤昌哉が『自民党戦国史』で描き出した権力亡者の大平も事実の一片を語っているに過ぎない。生前大平はローマ神話の二つの顔を持つヤヌス神を例え話に好んで用いた。彼自身もまた、郷土を愛し、読書を何より好んだ文人政治家の顔と、自民党での果てなき派閥闘争を戦う権力者の顔を具有するヤヌスであった。大平の実像を理解するためには、我々はこのヤヌスの二つの横顔を知らねばならない。

今回リリースされた「大平正芳関係文書」は、大平が志半ばでの死を遂げた後、香川県観音寺市の大平正芳記念館に保管されてきた第一級の史料である。三角大福の熾烈な権力闘争を戦い抜いた宰相の私文書を、我々は高

画質のデジタル画像で手にとれるようになった。それらは大平の足跡を記した日程表に加え、地元や選挙関係から行政改革、日米関係・日中関係といった外交問題まで多岐に及んでいる。

注目すべきは、大平没後に伝記編纂のために収集された浩瀚な資料であろう。関係者への膨大なインタビュー記録は、同時代に公表するには生々し過ぎたゆえに『大平正芳回想録』に採録されなかった証言が多く含まれている。これらは研究者には知られていない事実も多くあり、将来の大平研究には欠かせない貴重な素材である。「大平正芳関係文書」は、大平の人物研究にとどまらず、1970年代の日本政治外交史を理解するためにも不可欠の史料といえよう。



「竹下氏インタビュー原稿」

大平正芳の複眼的思考 — 「楯円の思想」から大平研究会まで

東京大学教授 宇野 重規

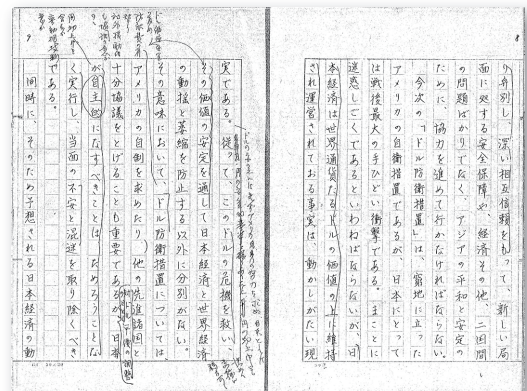
大平正芳は、今日あらためて真剣に再検討すべき戦後日本の政治家の一人である。たしかに首相として政権を担った期間は長くない。彼が首相になるにあたって、自らの政策のみならず、拠って立つべき思想と歴史観を練った時間を思うと、彼が官邸にいた期間はあまりに短かった。とはいえ、文人であった大平は自らの手で多くの文章を残している。卒業論文のテーマにトマス・アクィナスの協同体思想を選び、大蔵省に入ってから仲間とともに勉強会を開き、ケインズの『貨幣論』などを読み込んだ大平の学問的蓄積は深い。

大平の思想を一言で表現すれば、「楯円の思想」になるであろう。世の中の重要な事柄は、必ずしも一つの同心円に収まらない。むしろ二つの競合する価値を、いかに両立させていくかにこそ、英知は求められる。彼は官僚時代から自由と秩序、政府の課税権と納税者の権利を考え続けた。後年、政治家になってからも現在ばかりを考えるのではなく、「過去と未来」の両方を踏まえることが「健全な保守」の要件であると述べている。わかりやすい言葉、一刀両断に物事を断じる言葉ばかりが目立つ今日、「鈍牛」とも呼ばれた大平の、粘り強い複眼的思考の意義は高まるばかりである。

大平は吉田茂以来の自民党の保守本流を継承するのみならず、自ら若手の知識人と官僚を糾合して政策研究会を結成した。そこで取り上げた「田園都市」「環太

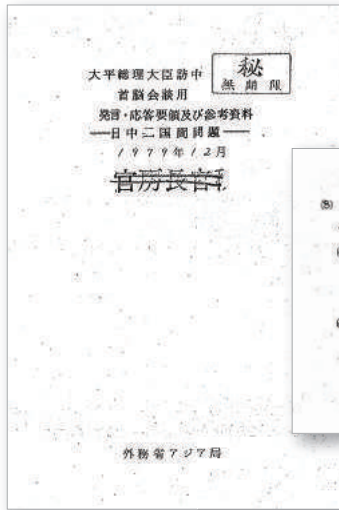
平洋連帯」「文化の時代」といったテーマは、今なお日本にとって重要な課題であり続けている。経済成長以降の日本社会にとって目指すべき価値は何か、いかに文化的価値を人間に取り戻すか、そして都市と地域コミュニティの両立は可能か。研究会に出席することはもちろん、メンバーの人選や課題設定にまで気を配った大平の思いは深かった。

今回のオンライン版では、大平の手による著作の原稿・草稿類も多数収録されていると聞く。大平正芳関係文書をオンラインで読むことができるようになったのを機に、大平の残した政治的・思想的考察を、あらためてじっくり読み直してみたい。

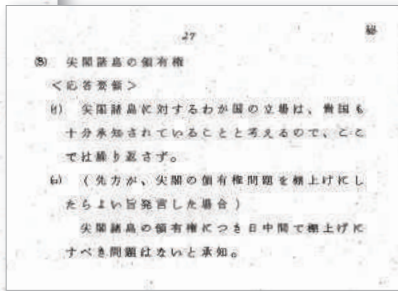


「秘 潮の流れを変えよう（未定稿）」

戦後政治史の中枢を照らす原史料群

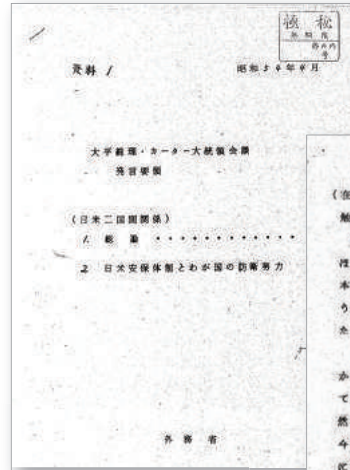


日中関係

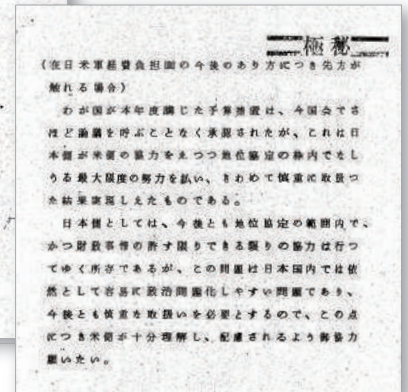


「大平総理大臣訪中首脳会談用
発言・応答要領及び参考資料」
(外務省アジア局)

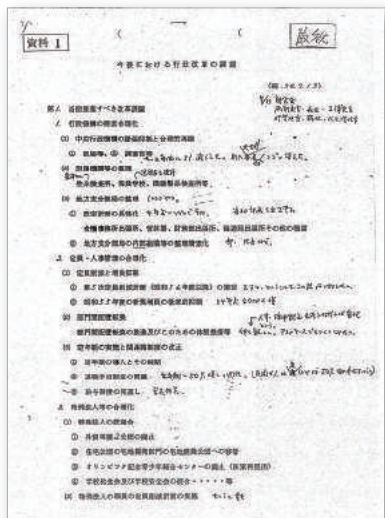
日米関係



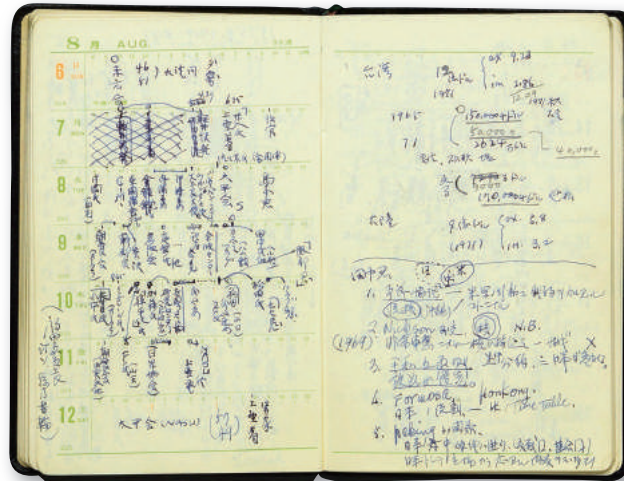
「大平総理・カーター大統領
会談発言要領」(外務省)



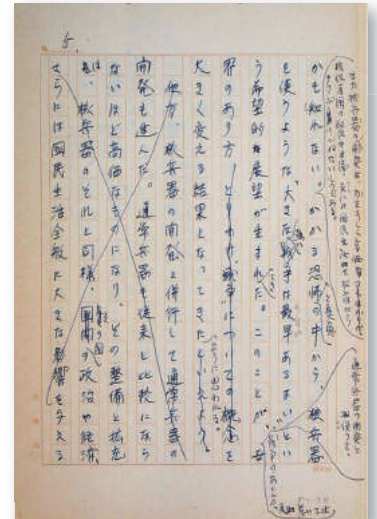
行政改革



大平正芳日記・手帳



大平正芳原稿・草稿



「今後における行政改革の課題」

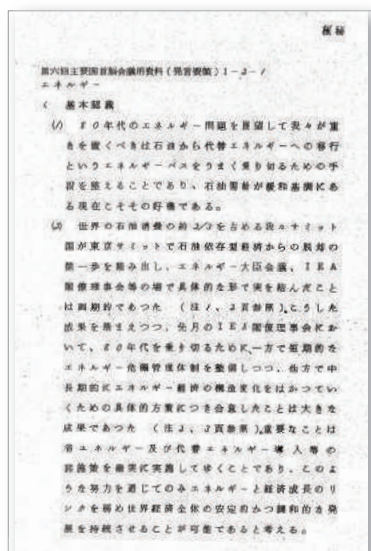
「大平正手帳 1972」

「日本の新しい外交」草稿

インタビュー資料



東京サミット、 ヴェネチア・サミット



「中曽根康弘氏インタビュー」

「楠田實資料（佐藤栄作官邸文書）」と
横断検索が可能

オンライン版

大平正芳関係文書

戦前の興亜院時代から、戦後、池田内閣の外務大臣期（1962～1964）、佐藤内閣の通産大臣期（1968～1970）、田中内閣の外務大臣期（1972～1974）、三木内閣の大蔵大臣期（1974～1976）、そして自身の内閣総理大臣期（1978～1980）に至るまで、大平の生涯に沿って貴重な資料を収録。鈴木政権期（1980～1982）の取材メモなど大平死去後の資料も含む。

「近現代政治外交史データベース」のコンテンツとして、2016年に刊行された「オンライン版 楠田實資料（佐藤栄作官邸文書）」と横断検索が可能である。

「第六回主要国首脳会議用資料
（発言要領）」

大平正芳記念財団旧蔵

オンライン版 大平正芳関係文書

編集：小池 聖一 広島大学教授、福永 文夫 獨協大学教授

価格 ￥400,000 (税別)

プラットフォーム：J-DAC ジャパン デジタル アーカイブズ センター
完全買切型（ご購入後のプラットフォーム利用料、年間維持費用は不要です）

収 録 内 容

週間日程・日誌

大平事務所日誌・日程関係

大平正芳書簡

伝記資料及び草稿

書類

瀬戸大橋関係

解散問題

東京サミット

大平総理会合資料

特別国会所信表明

政治資金疑惑再発防止

社公民連合政権構想

内閣不信任、記者会見関係

訪米等関係

第 87 国会施政方針演説作成資料

第 88 国会施政方針演説作成資料

第 91 国会施政方針演説作成資料

行政改革

中国出張

訪米発言要領関係

大平首相対談関係

大平事務所書類

選挙関係

インタビュー関係

外務大臣期

大平大臣会見 1972 年

大平大臣懇談 1972 年 7 月～ 12 月

大平大臣会見 1973 年 1 月～ 12 月

大平大臣懇談 1973 年 1 月～ 12 月

大臣訪中 1974 年 1 月

大臣懇談 1974 年 1 月～ 12 月

大平大臣会見 1974 年 1 月～ 12 月

大平事務所作成ファイル

覚書・硯滴

大平正芳日記、ノート

好評発売中

「大平正芳関係文書」と横断検索可能

オンライン版 楠田實資料（佐藤栄作官邸文書）

編集：和田 純（神田外語大学教授） 全 2 部 価格 ￥800,000 (税別)

戦後最長の佐藤栄作政権（在任期間：1964～1972）を支えた首席秘書官楠田實（1924～2003）が残した、未公開官邸資料。外交から内政まで第一級の極秘資料で構成される事実上の「佐藤栄作文書」。四千点を超える一大コレクションであり、今後戦後史を語るうえで不可欠な基本史料である。

 **MARUZEN-YUSHODO**

丸善雄松堂株式会社 学術情報ソリューション事業部 研究支援コンテンツ開発部

〒105-0022 東京都港区海岸 1-9-18 国際浜松町ビル

TEL.03-6367-6025 FAX.03-6367-6188 e-mail archives@maruzen.co.jp

戦前から60年代まで 現実政治を生きた知識人の軌跡

オンライン版

矢部貞治関係文書

原本所蔵：政策研究大学院大学図書館

監修：伊藤 隆 東京大学名誉教授・政策研究大学院大学名誉教授

刊行にあたって

東京大学名誉教授・政策研究大学院大学名誉教授 伊藤 隆

東大法学部政治学科の教授であった矢部貞治は、昭和十年代、日本の危機的状況のなか、その突破を目指す政策研究団体——昭和研究会、国策研究会、海軍省調査課関係の政治懇談会等々のリーダー的役割を果たし、また近衛文麿のアドバイザー的地位にもあった。彼はそこで手にした文書を丹念に保存した。戦後、東大教授を辞任した後も、憲法調査会、公安審査委員会、拓殖大学総長等々多くの職に就いて活躍し、中曽根康弘とも深い関わりを持った。本文書群は、戦前戦後を通じ、彼が遺した膨大な原史料で構成されている。

彼は詳細な日記をのこし、それらの大半は既に読売新聞社から公刊されている。この日記と本文書群を照らし合わせて検討する事によって、昭和戦前・戦後期の政治・政策をめぐる、政治家・官僚・軍人・学者・ジャーナリストの姿とその動きを立体的に捉える事が可能になろう。また、彼と関係の深かった人物——例えば海軍省調査課・海軍大学校関係では高木惣吉の関係文書も公刊されており、国会図書館憲政資料室にも多くの関係者の文書が収蔵されている。それらを併せて検討することによって、より深い分析が可能になるであろう。

本文書群は、遺族から衆議院憲政記念館に寄託されたもののうち、日記を除く大半を筆者の勤務していた政策研究大学院大学に移譲、後に遺族から寄贈を受けたものである。憲政記念館にも日記以外の若干の文書類が残されている。それもいずれ全面的に公開されることを期待する。



戦前戦後を通じて現実政治に深く関わった政治学者・矢部貞治（1902-1967）の旧蔵資料。矢部の自筆資料や書簡のほか、戦前から戦後にかけて矢部が関わった諸団体の内部資料など、約六千点に及ぶ膨大な原史料を収録。激動の昭和史に迫る第一級の史料群。

出版・発売元：丸善雄松堂株式会社

昭和史のなかの政治学者——「矢部貞治関係文書」刊行に寄せて

東京大学教授 酒井哲哉

昭和史については膨大な研究の蓄積があるが、戦前・戦後の激動に政治学者がどのような対応をしたかについては必ずしも十分な考察がなされてこなかったように思う。もちろん、戦後民主主義の理論的基礎付けを行った政治学者や、これとは逆に戦時体制を積極的に支持した知識人についての研究は、ここ 20 年くらいの間にずいぶんと研究が進められてきた。しかし、戦前・戦後を通して現実政治に積極的に関ってきた人物の生涯を通して昭和史を検討する試みはまだ少ない。また戦後については、革新勢力を支持していた知識人に関心が集中し、保守・中道勢力に期待を寄せていた政治学者は何故だか無視される嫌いがあった。

その意味で、今回「矢部貞治関係文書」が伊藤隆東京大学名誉教授の監修によりオンラインで利用できるようになったこと

は、これまでの研究の空隙を埋めるための条件が整ったことであり、大変喜ばしいことである。戦前期の矢部は、近衛文麿のブレインとして近衛新体制の設計に関わり、また海軍省調査課の委嘱で大東亜共栄圏の理論化に従事した。そして戦後の矢部は、憲法調査会を通して憲法改正をめぐる政治に関与し、戦後の代表的な保守政治家 中曽根康弘とも交流していた。矢部の軌跡は、戦前・戦後を通して現実政治に関った人物の、一つの典型的な発想の型を知るうえで格好の事例なのである。

戦前・戦後を恣意的な図式で裁断するのではなく、その両者の複雑な関係性を見極めることは現在を生きるわれわれにとって重要な課題である。「昭和史のなかの政治学者」を今回利用可能になった「矢部貞治関係文書」によって浮き彫りにできたら、陰影に富む歴史像をもつことができるだろう。

「時局」と社会科学の関係を描き出す多角的な史料

桐蔭横浜大学教授 出口雄一

「時局」にどのように対応するかという問題は、社会科学にとっては極めて難しい問題である。矢部貞治は、戦時における「非常時」への対応、戦前から戦後にかけての憲法秩序の変動、更に、「戦後体制」の形成と定着といったそれぞれの「時局」に対して、鋭い観察眼と柔軟な思考に支えられて対応を行った、類稀な知性を備えた社会学者であった。矢部の「時局」に対する応答のあり方は、その時々政治や社会を映し出す鏡のようなものであると言える。

既に我々は、公刊された詳細な日記を通じて、矢部の思考とその背景にある幅広い人間関係を辿る手がかりを得ている（『矢部貞治日記』全 4 巻 読売新聞社）。この度、政策研究大学院大学が所蔵する「矢部貞治関係文書」が広く活用され得る環境を

備えたことは、社会科学が「時局」とどのように切り結んできたか、という課題をより深く考える上で、大変な朗報である。

法制史の観点からは、新体制運動のブレーンとしての著名な役割はもとより、海軍省や日本学術振興会等の場で敗戦直前まで様々な角度から検討された明治憲法秩序の性質とその限界についての史料、そして、日本国憲法の制定による新旧憲法秩序の交代という事態への対応、とりわけ、副会長として重要な役割を果たした憲法調査会に関する豊富な史料や、行政審議会・選挙制度調査会等の関連史料が目を引く。既存の研究が、本文書によってより鮮やかに色づけられ、深みを増していくことを期待してやまない。

戦前・戦後の日本政治史と政治思想を考える基本史料

首都大学東京教授 源川真希

矢部貞治は戦前日本の代表的な政治学者であり、昭和初期におけるデモクラシー研究の第一人者であった。彼は、ヒトラーが台頭するドイツの政治などを観察しながら独自の理論形成を行い、日本の軍部に批判的な態度をとっていた。しかし 1940（昭和 15）年には、近衛文麿を中心とする新体制運動のブレインとして、政治の渦中に身を置くことになる。

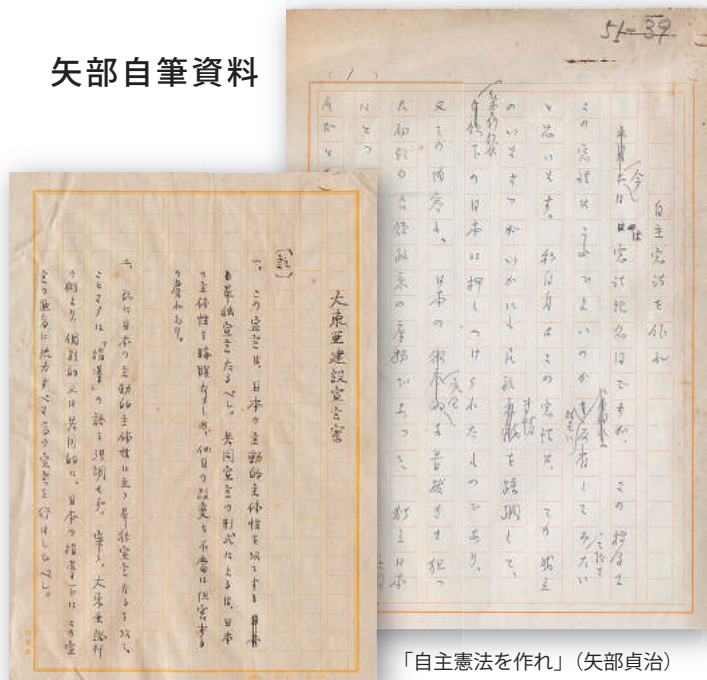
このたび、政策研所蔵の「矢部貞治関係文書」が、伊藤隆先生の監修のもと、オンラインの形で幅広く利用できるようになったのは、戦前・戦後の日本政治史研究、政治思想研究にとって喜ばしいことである。本文書は、例をあげれば昭和研究会や新体制運動、それに海軍省調査課や外務省などでの政策立案に関するもの、戦後の憲法調査会、選挙制度調査会・審議会にかかわるものなど有益な史料を含んでいる。また彼が総長をつとめた

拓殖大学についての史料、明治百年記念事業に関する文書、その他、彼が論説を執筆した雑誌などから、広い領域にわたる歴史に光をあてることができる。

そして私自身がワクワクするのは、彼の研究の足跡をうかがわせる断片的なメモなど、これまで十分に利用されてこなかった史料の存在である。刊行されている日記（『矢部貞治日記』全 4 巻 読売新聞社）や彼の書いた多くの著作と照らしあわせながら史料を読み解き、彼が理論形成をはかっていく足跡をじっくりとたどることができるのは、研究者にとってまことに幸せなことである。本文書がこれまで以上に広く活用され、戦前・戦後の政治史と政治思想の研究がなおいっそう進展することを願っている。

戦前から戦後にかけての多様な原史料群

矢部自筆資料



「大東亜建設宣言書案」(矢部貞治)

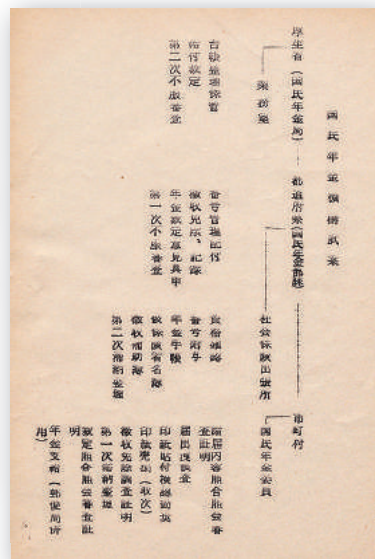
「自主憲法を作れ」(矢部貞治)

海軍省



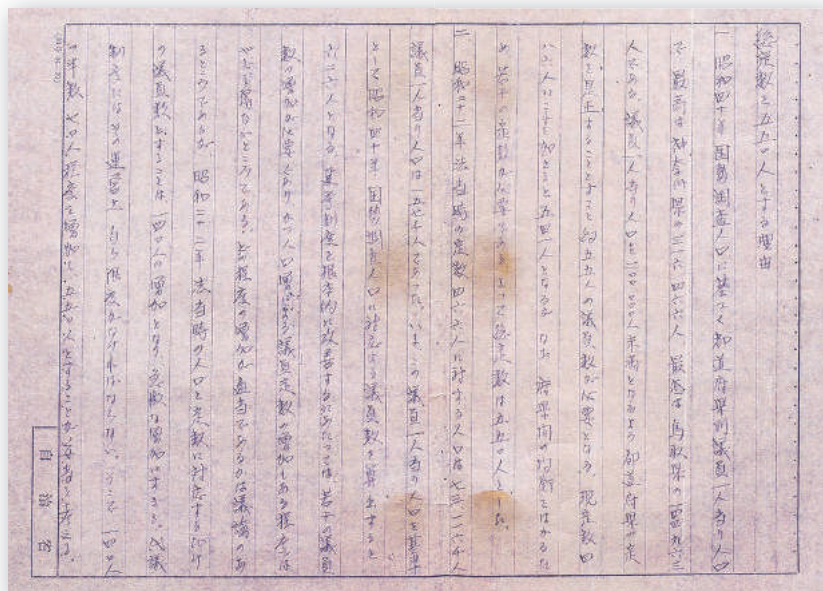
「大東亜共栄圏論」(未定稿)
(海軍省調査課 1942.9.1)

行政審議会



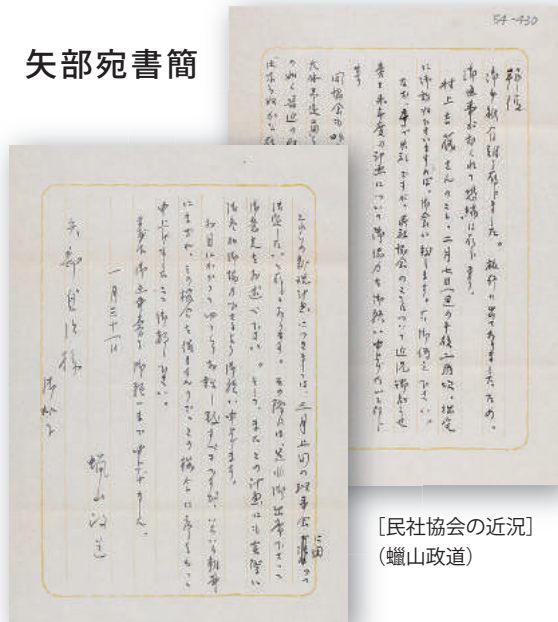
「国民年金機構試案」

選挙制度



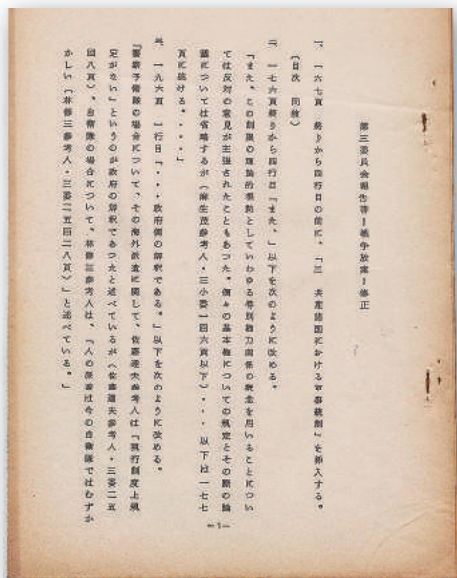
「総定数を五五〇人とする理由」(選挙制度審議会)

矢部宛書簡



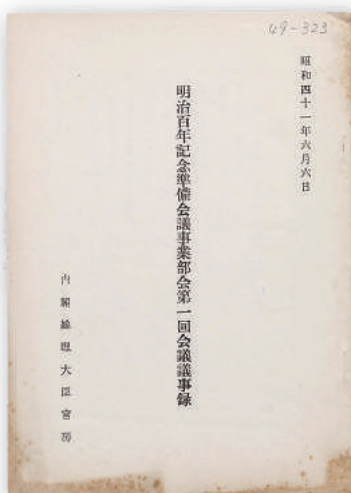
「社協会の近況」
(蠟山政道)

憲法



「第三委員会報告書—戦争放棄—修正」(憲法調査会)

明治百年記念事業



「明治百年記念準備会議事業部会
第一回会議事録」
(内閣総理大臣官房 1966.6.6)

「楠田實資料 (佐藤栄作官邸文書)」
「大平正芳関係文書」と横断検索が可能

オンライン版

矢部貞治関係文書

矢部の手元に残された約 6,000 点に及ぶ膨大な原史料を収録。戦前から 60 年代後半までをカバーし、矢部の自筆資料や書簡のほか、戦前から戦後にかけて関わった諸団体——昭和研究会、海軍省・海軍大学校、憲法調査会、行政審議会、公安審査委員会、選挙制度審議会、明治百年記念準備委員会などの内部資料で構成されている。「近現代政治外交史データベース」のコンテンツとして、既刊の「楠田實資料 (佐藤栄作官邸文書)」「大平正芳関係文書」と横断検索が可能である。

オンライン版 矢部貞治関係文書

原本所蔵：政策研究大学院大学図書館

監修：伊藤 隆 東京大学名誉教授・政策研究大学院大学名誉教授

価格 ￥400,000 (税別)

プラットフォーム：J-DAC ジャパン デジタル アーカイブズ センター
完全買切型（ご購入後のプラットフォーム利用料、年間維持費用は不要です）
＜1ヶ月の無料トライアル受付中、お申し込みは archives@maruzen.co.jp まで＞

収 録 内 容

戦前・戦中資料

昭和研究会
海軍省・海軍大学校
議会制度審議会
総合計画局
調査研究動員本部
日本学術振興会
軍事保護院・軍人援護学会

戦後資料

選挙制度関係

選挙制度調査会・審議会
選挙管理委員会
自治省選挙局
自由民主党政務調査会選挙調査会

憲法関係

憲法調査会
憲法研究会
自主憲法期成同盟
自由民主党憲法調査会
憲法擁護国民連合

行政改革

行政審議会
臨時行政調査会

国際情勢資料

外務省資料
日華協力委員会
在日米大使館
(アイゼンハワー訪日関係資料)
日韓条約批准期成会

警察・公安関係

警察庁・警察局・警察大学校
公安審査委員会
公安調査庁
「公安週報」

中央教育審議会

明治百年記念事業

矢部関連資料

矢部自筆資料

メモ
草稿・原稿
ノート

矢部宛書簡

矢部執筆記事

好評発売中

「楠田實資料（佐藤栄作官邸文書）」「大平正芳関係文書」と横断検索が可能

オンライン版 楠田實資料（佐藤栄作官邸文書）

編集：和田 純 神田外語大学教授 全2部 価格 ￥800,000 (税別)

戦後最長の佐藤栄作政権（在任期間：1964～1972）を支えた首席秘書官楠田實（1924～2003）が残した、未公開官邸資料。外交から内政まで第一級の極秘資料で構成される事実上の「佐藤栄作文書」。四千点を超える一大コレクションであり、今後戦後史を語るうえで不可欠な基本史料である。

オンライン版 大平正芳関係文書

編集：小池 聖一 広島大学教授、福永 文夫 獨協大学教授 価格 ￥400,000 (税別)

第68・69代内閣総理大臣をつとめた大平正芳（1910～1980）が残した膨大な文書群。大平正芳自筆の日記・手帳から、書簡、外務省や通産省などの官庁資料、国会答弁・演説用の原稿資料、選挙関係資料、さらには大平の回想録執筆にあたって行われた政財官の重要人物へのインタビュー記録など、膨大かつ多様な原史料を収録。

近現代史の基礎文献『矢部貞治日記』を、未公刊部分含め完全収録。
戦時下の極秘史料も搭載した第一級の資料集

オンライン版

矢部貞治関係文書 補遺

原本：矢部家所蔵・衆議院憲政記念館寄託



読売新聞社提供

昭和初期を代表する政治学者 矢部貞治（1902-1967）の旧蔵資料。大正 10 年～昭和 42 年までの『矢部貞治日記』原本やノート等の自筆資料のほか、矢部の手元に残された戦前・戦中の原史料群も収録。戦前から戦後にかけて現実政治を生きた知識人の軌跡をたどる第一級の史料群。

出版・発売元：丸善雄松堂株式会社

政治学者・矢部貞治、その人生と時代を知る意味

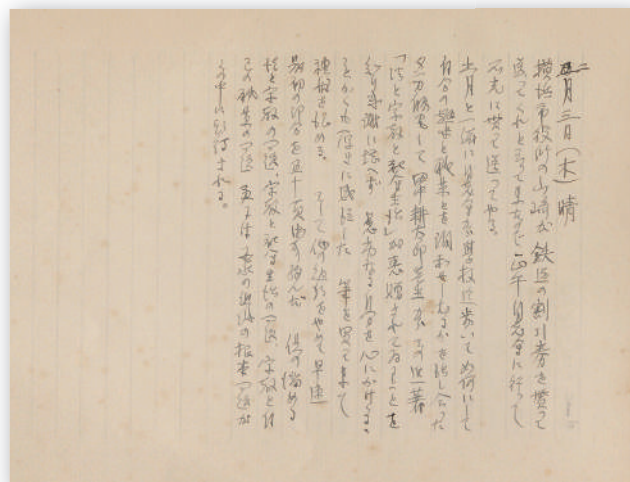
東京大学教授 荻部直

『矢部貞治日記』をひそかに座右の書としている日本近代史研究者は、実は少なくないのではないか。「ひそかに」と書いたことにはわけがある。矢部貞治は、一九三〇年代、リベラル・デモクラシーの危機が叫ばれる時代に、当時の最新の政治理論の研究に努めた政治学者である。東京帝国大学法学部教授を務めながら、昭和研究会と新体制運動、さらに戦時下では海軍省調査課の政治懇談会などに参加し、現実政治との関わりを続けてきた。

しかし戦後には時代の転換とともに、ジャーナリスティックな意味での知識人の世界の主流からははずれてしまう。「戦後民主主義」やマルクス主義の影響力が強いなかで、憲法調査会や中央教育審議会で活躍した矢部は、体制派、もっと言えば戦後思想に対するアンチの存在のように位置づけられたと思われる。著書は版を重ねていたが、学問の最先端の現場からは離れた存在となっていた。

だが、かつて読売新聞社から刊行されたその日記は、きわめておもしろい。このたび、刊本では削除された部分も含め、憲法記念館に寄託された日記の原本が、このデータベースには収録されている。時期は一九二一年の旧制高校入学時から始まり、一九六七年、逝去の三日前にまでわたる。その間、戦前・戦中・戦後と変転する時代のなかで、

この政治学者が何を考えていたか。同僚であった田中耕太郎・南原繁・丸山眞男との関係はどうだったのか。政治家や官僚・軍人といかに交流していたのか。同時に収録される、昭和研究会や海軍省調査課の関連文書とともに、歴史のなかに生きた個人の軌跡を、当人の直筆によってリアルに知ることのできる、一級史料である。



昭和2年2月3日条 [田中耕太郎『法と宗教と社会生活』について]

新しい昭和史解明のための新史料群

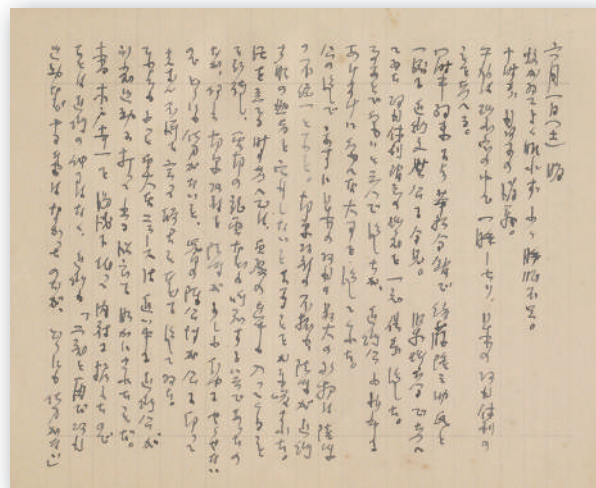
帝京大学教授 筒井清忠

矢部貞治の意義を改めて認識したのは、『近衛文麿』（岩波現代文庫）を書いた時であった。近衛文麿の評伝としてはすでに優れた岡義武先生の『近衛文麿』（岩波新書）があり、伊藤隆先生の『近衛新体制』（中公新書、講談社学術文庫）をはじめとする一連の研究もあったので、そうした中に私自身の評伝を加えるのは僭越であることは承知していたが、一方で昭和史、他方で教養主義の研究をしてきた私はその二つを架設する代表的象徴としての近衛の伝記を書かねばならなかった。

その時に圧倒的な存在として浮かび上がってきたのが近衛文麿の新体制に最も深くコミットしたイデオログ矢部貞治の手になる『近衛文麿』伝であった。これを重要な武器にしてとくに新体制期などを何とか執筆していったが、その途中で矢部が執筆に際して元にした膨大な資料の存在が浮かび上がってきた。しかし、残念ながら当時それは容易に見うるものではなかった。それが今回ついにその全部が見られうることになったのである。研究を志す者としてこれほどうれしいことはない。

近衛は思想的矛盾を抱えた存在であったから色々なことが言われたが（全部のレッテルを継ぎはぎすると実にちぐはぐな存在となる）、矛盾して見える中からその人物の核心に当たるものを取り出し統一したイメージで捉えることが

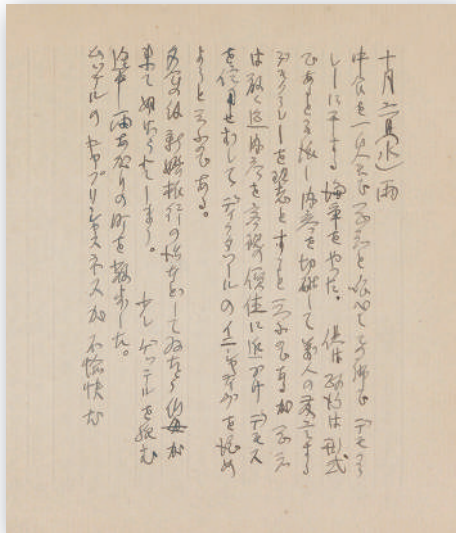
伝記研究者の仕事である。しかしこの仕事をやり抜くためにはその思想を支えた存在の詳細な検討は欠かせない。断片的史料の中にこそその人の核心が秘められていることが多いからだ。近衛に最も近く、とくに新体制の思想的バックボーンだった矢部のいわば断片的文書まで含めた本文書の出版によりまた新たな『近衛文麿』伝が書かれうるものと思われる。出版を待つこと切なるものがある。



昭和15年6月1日条 [近衛文麿との初めての会見]

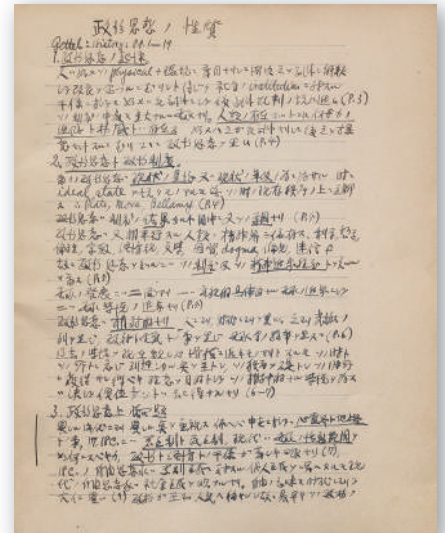
戦前から戦後の政治状況を映し出す膨大な日記と原史料群

矢部貞治日記



大正 15 年 10 月 6 日条 [岡義武との議論]

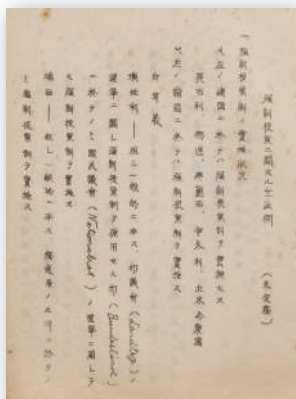
矢部自筆ノート



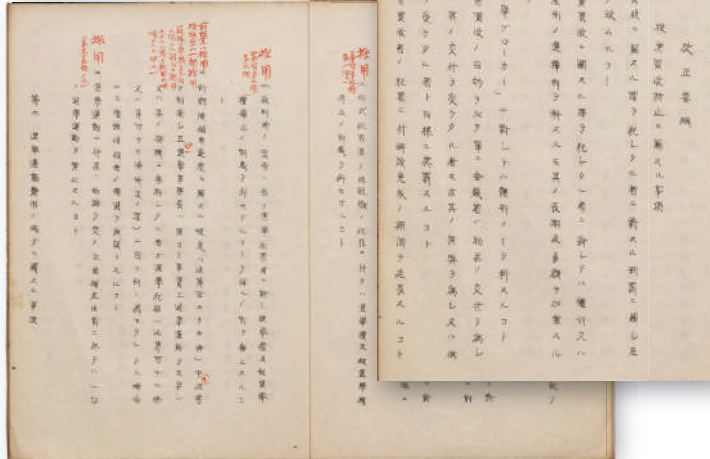
「矢部貞治ノート」

昭和 8 年 5 月 22 日条 [京大滝川事件]

衆議院議員選挙法改正関係

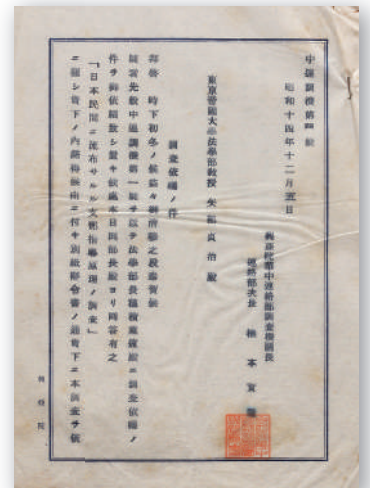


「強制投票二関スル立法例 (未定稿)」



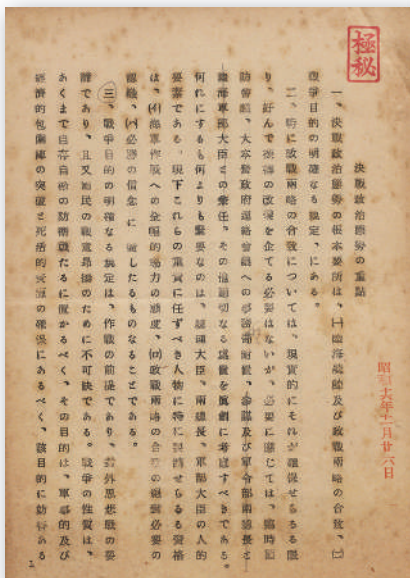
「衆議院議員選挙法改正要綱」(法制審議会 昭和 7 年 11 月 21 日)

興亜院

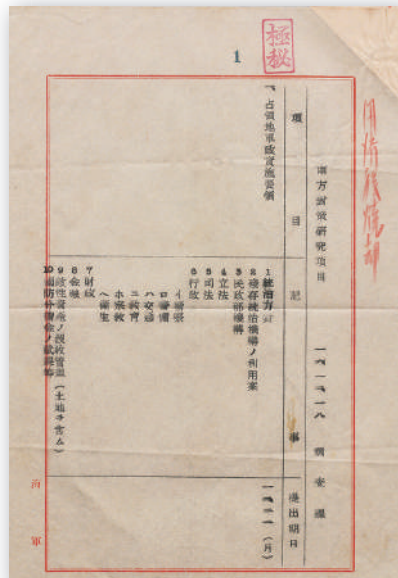


「調査依頼ノ件」
(興亜院華中連絡部 昭和 14 年 12 月 5 日)

海軍省



「極秘 決戦政治態勢の重点」
(昭和 16 年 11 月 26 日)



「極秘 (焼却指示付) 南方対策研究項目」
(海軍省調査課 昭和 16 年 12 月 18 日)

オンライン版

矢部貞治関係文書 補遺

矢部の日記、ノートなどの自筆資料に加え、矢部の手元に残された戦前・戦中の原史料群で構成。長期かつ膨大な『矢部貞治日記』の原本は未公開部分も含め完全収録。昭和 6 年の衆議院議員選挙法改正関係資料や、戦時下の海軍省、大東亜省、昭和研究会等、矢部の関わった諸団体の内部資料もあわせて搭載する。

既刊の「オンライン版 矢部貞治関係文書」を補完する内容であり、双方をあわせて導入することで戦前から戦後にかけて現実政治を生きた矢部の旧蔵資料を横断的に利用することが可能になる。

「近現代政治外交史データベース」の他のコンテンツとの横断検索も可能。

オンライン版 矢部貞治関係文書 補遺

原本：矢部家所蔵・衆議院憲政記念館寄託

価格 ￥270,000 (税別)

プラットフォーム：J-DAC ジャパン デジタル アーカイブズ センター
完全買切型（ご購入後のプラットフォーム利用料、年間維持費用は不要です）
<1ヶ月の無料トライアル受付中、お申し込みは kenkyushien@maruzen.co.jp まで>

収 録 内 容

矢部自筆資料

日記（大正10年3月21日～昭和42年5月4日）
手帳・ノート

戦前・戦中資料

海軍省
決戦体制下の諸方策文書
東亜省設置関係資料
海軍省調査部研究資料

海軍大学校

兵理研究関係資料

外務省

大東亜省

興亜院

昭和研究会

大政翼賛会

国策研究会

衆議院議員選挙法改正関係資料

好評発売中

近現代政治外交史データベースは横断検索が可能です

オンライン版 矢部貞治関係文書

原本：政策研究大学院大学図書館所蔵

監修：伊藤 隆 東京大学名誉教授・政策研究大学院大学名誉教授

価格 ￥400,000 (税別)

政策研究大学院大学図書館所蔵の矢部貞治旧蔵資料を収録。矢部の自筆資料や書簡のほか、戦前から戦後にかけて関わった諸団体—昭和研究会、海軍省・海軍大学校、憲法調査会、行政審議会、公安審査委員会、選挙制度審議会、明治百年記念準備委員会などの内部資料で構成。1920年代から1960年代後半までをカバーしており、激動の昭和史に迫る第一級の史料群。

オンライン版 楠田實資料（佐藤栄作官邸文書）

編集：和田 純 神田外語大学教授 全2部 価格 ￥800,000 (税別)

戦後最長の佐藤栄作政権（在任期間：1964～1972）を支えた首席秘書官楠田實（1924～2003）が残した、未公開官邸資料。外交から内政まで第一級の極秘資料で構成される事実上の「佐藤栄作文書」。
四千点を超える一大コレクションであり、今後戦後史を語るうえで不可欠な基本史料である。

オンライン版 大平正芳関係文書

編集：小池 聖一 広島大学教授、福永 文夫 獨協大学教授 価格 ￥400,000 (税別)

第68・69代内閣総理大臣をつとめた大平正芳（1910～1980）が残した膨大な文書群。大平正芳自筆の日記・手帳から、書簡、外務省や通産省などの官庁資料、国会答弁・演説用の原稿資料、選挙関係資料、さらには大平の回想録執筆にあたって行われた政財官の重要人物へのインタビュー記録など、膨大かつ多様な原史料を収録。

戦前から80年代まで、元首相が残した一大原史料群

明治大学史資料センター所蔵

オンライン版

三木武夫関係資料

編集：明治大学史資料センター



参議院予算委員会で答弁する三木
(外務大臣時代)

第 66 代内閣総理大臣をつとめた三木武夫（1907 ～ 1988）が残した膨大な文書群。外交文書、省庁・党内資料など各種政策資料をはじめ、国会答弁資料、総裁選・選挙関連、講演・演説原稿、日記・手帳・書簡・メモなど、戦前から 80 年代にかけての大量の一次史料で構成され、質量ともに一級の史料群である。

出版・発売元：丸善雄松堂株式会社

「教材としての原史料」を実現するオンライン版

九州大学准教授 中島 琢磨

三木武夫元首相の貴重な文書が、オンラインで読めるようになったことは、政治や外交の歴史に関心を持つ人たちにとても嬉しいニュースだ。

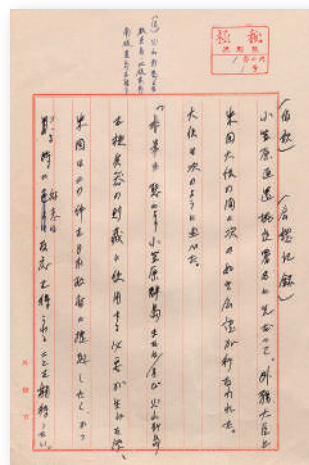
1950年代前半、三木は国民民主党、改進黨の有力政治家として、吉田茂首相率いる自由党と対峙した。戦後史では、吉田や吉田に近い政治家たちの行動が着目されがちだが、三木の視点に立てば、また別の側面から戦後の政治を捉えることができる。たとえば改進黨の結党に関する文書を集めたファイルを読むと、三木たちが自由党の政策にいかに対峙しながら、日本の完全な独立を求めたか、その経緯が分かる。三木たちが論じた革新や進歩主義は何だったのか、後の自民党につながる多様な政策を辿ることができる。

池田勇人内閣期と佐藤栄作内閣期の文書の量は非常に多く、高度成長期の日本政治を知る絶好の資料だ。内政分野では自民党関係、三木派関係、各種法案関係など、外交分野では日米関係、日中関係、ベトナム問題など多岐にわたる。とりわけ外相時代の文書は魅力的だ。当時外務省北米局（アメリカ局）にいた堂之脇光朗氏が、三木外相について、自分で文書にメモを書き入れて部下に渡す細かい人だったと、好意的に評価していたのを思い出す。とくに外相在任中には沖縄と小笠原の返還問題が動いており、重要文書が残っている。返還後の小笠原の核貯蔵をめぐる問題など、「三木武夫関係資料」だけで

しか読めない文書もあり、日本政府の苦心の跡を辿ることができる。

今回、三木が日常の生活のなかで書き留めたり、書き流していたメモ類も公開される。外交文書と違って日付はなく、三木が何を考えながら書いていたのか、解釈しながら読む必要があり、時間はかかる。だが、本人の思考プロセスを直接知ることのできる資料だ。オンライン版の配信により、こうした時間のかかる文書も自分のペースで読めるようになった。

従来アクセスのハードルが高くもっぱら研究者にしか使われてこなかった原史料だが、オンラインで気軽に触れられるようになったことで、大学生にとっても親しみやすい資料となり、授業での教材としての活用も期待できる。もちろん研究資料としても一級であり、既刊の「楠田實資料」や「大平正芳関係文書」との相互補完によって、戦後史研究の深化が飛躍的に進むだろう。



「(会談記録)」〔小笠原返還交渉〕

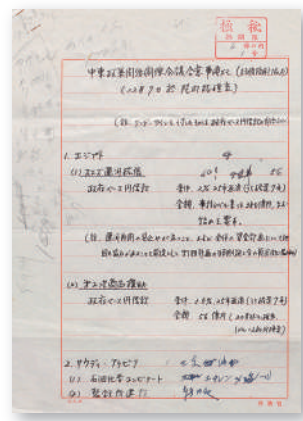
「理想をもったバルカン政治家」の面目 — 中東8カ国への三木使節団派遣

東洋英和女学院大学学長 池田 明史

1973年、第四次中東戦争に際して発動されたアラブ産油諸国のいわゆる「石油戦略」は、日本をパニックに陥れた。アラブ側は日本を含めた非友好国（中立国）に対して、段階的な石油禁輸措置を採り、全体の産油量も削減すると恫喝してきたからである。その衝撃は、日本の高度成長を支えてきた輸入石油が入って来なくなるという経済面での脅威にとどまらなかった。それまでパレスチナ問題については「善意の第三者」を自認してきた日本の姿勢が、アラブ側からは宿敵イスラエルの最大の支援者である米国への追従であって、友好国とは看做されないとの批判を突きつけられたのである。

このような危機の中で、アラブ諸国に対し、石油の対日輸出制限の解除を求める政府特使として白羽の矢が立ったのが田中内閣で副総理兼環境相の任にあった三木武夫であった。三木はすでに、佐藤栄作内閣の通産相、外相を歴任しており、アジア重視を標榜してベトナム戦争の和平仲介に動くなど相対的に米国から距離を置く姿勢を見せていた。「アラブへのアブラギ詣で」とか「ものくれ外交」などと揶揄されつつ、結果としてアラブ諸国から日本の友好国としての認定と産油制限の緩和とを取り付けて帰国した。

本資料は、対アラブ特使派遣の背景や経緯、成果等に関して、外務省など関係省庁・出先機関の公文書や公電類、関連民間企業・団体の各種文書、あるいは三木を含めた個人のメモ・談話・講演録などをほぼ網羅していて、戦後日本外交の画期を成した三木使節団研究の極めて重要な一次史料の集成になっている。そこから浮かび上がってくるのは、「アブラギ」といった卑屈な表現からは程遠い、パレスチナ問題の解決に正面から真摯に向き合おうとする三木の熱情である。その至誠が通じたからこそ、まだごちない日本の自主外交において所期の成果を上げることができた。「理想をもったバルカン政治家」を自任した人間三木武夫の面目躍如といったところであろう。日本政治外交史の学究にとどまらず、広く政治や国際関係の領域の同好の士に、本資料を強く推薦する所以である。



「中東政策関係閣僚会議合意事項メモ（経済技術協力）」
（12月7日於院内総理室）

原史料から見る、三木武夫とその時代

筑波大学教授 竹中 佳彦

1970年代半ば、米国の経済的・軍事的優位が揺らぐ中、石油危機によって世界的なインフレ・不況となり、サミット（先進国首脳会議）が開催されることになる。高度成長が途絶えた日本は、狂乱物価や財政難からの脱出が課題となった。

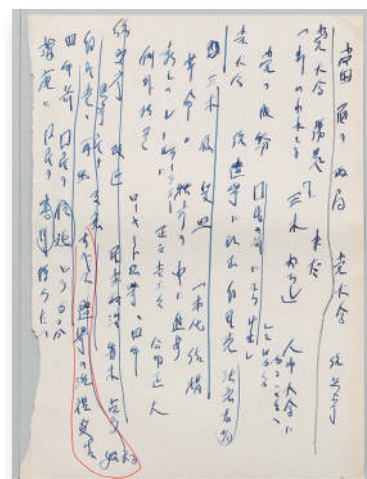
三木は、そのような時代の転換期に組閣し、革新寄りの政策を展開した。福祉を優先し、積極財政をとり、「生涯設計（ライフ・サイクル）計画」を構想し、他方で企業活動の倫理確立のための独占禁止法改正に取り組んだ。またデタント（緊張緩和）下の防衛力のあり方を定め、防衛費に歯止めを設け、武器輸出禁止を拡大した。企業・団体の政治献金の規制を強化する政治資金規正法改正など、政治浄化も目指した。しかし十分な成果を上げられぬまま、ロッキード事件による「三木おろし」、衆院選敗北で退陣することになる。

三木に対する毀誉褒貶は甚だしい。ただ、三木だけでなく、彼の生きた時代を研究するために、「三木武夫関係資料」は有用である。同資料は、数カ所に分散していた資料を三木家が明治大学史資料センターに寄贈したものである。

「第三部 内閣総理大臣期」には公文書も多数ある。行政の情報開示が不十分であり、首相が在任中に得た公

文書が廃棄される実態があることを考えると貴重である。同資料には肉筆のメモや日記もある。1993年、私が、三木家に日記等の私文書があるかを照会したとき、三木は原稿を清書させた後は、いつも草稿を破って捨ててしまっていたので、肉筆の原稿はほとんど残っていないし、日記も書いていないということであった。私が貴重な史料を託すに足る相手とはみなされなかったのだろう。だが結果的に、今回、同センターによってそれらが体系的に整理され、オンラインで閲覧できるようになったことは、学術的に極めて有意義なことである。

明治大学および丸善雄松堂の関係者のご尽力に敬意を表するとともに、本資料を活用した研究が輩出することを期待したい。



三木武夫自筆メモ（当面の政局）

平和外交と政治浄化 — 元宰相の飽くなき目標

北海学園大学教授 若月 秀和

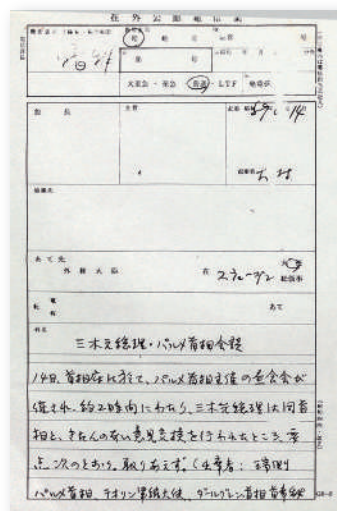
1976年12月に選挙敗北の責任をとって首相を退任した三木であったが、1980年まで三木派の領袖を続け、河本敏夫に派閥後継を譲った後も、議員在職50年を一年後に控えた86年に脳内出血で倒れるまで、首相経験者として、政治倫理の確立に向けた取り組みについて、時の首相たちを手厳しく批判するなど存在感を保った。

首相期以後の収録資料で目につく点は、福田・大平内閣期を中心に外遊資料・サミット関連など外交関係の比重が多いことである。事実、首相経験者として、精力的に外遊を重ねるとともに、1980年代になり東西対立が再燃するなかで、軍縮議員連盟会長として核軍縮にも取り組んでいる。もとより、三木は佐藤内閣で外相を務め、小笠原諸島返還を

実現するなど、外交通を自任していた。しかしながら、約2年間の首相在任中、外交問題で大きな成果は残せなかった。日中平和友好条約と日ソ平和条約の締結を目指すも、自身の権力基盤の弱さや国際情勢の壁に阻まれて、いずれも成就できなかった。また、ベトナム戦争終結を受けて、新たな日本の東南アジア外交を打ち出そうとするも、これも内外の客観情勢の機が熟さず、具体化できなかった。首相退任後も、外交に強い関心を抱き続けたのは、首相在任時の不完全燃焼感によるものではないか。

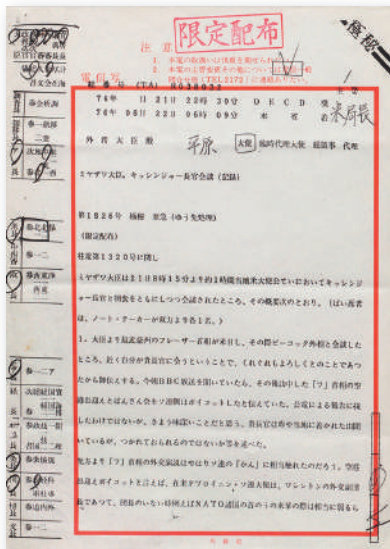
むろん、「クリーン三木」の一丁目一番地ともいえる、「選挙浄化特別措置法要綱」など政治浄化問題に関わる文書も、収録されている。三木は首相として政治資金規正法の改正などを実現するも、自身の目標達成の見地からは道半ばであった。刑事被告人たる田中角栄元首相の派閥は年々膨張を続け、歴代内閣に影響力を及ぼすなど派閥と金権がますます幅を利かす状況に対し、三木は警鐘を鳴らし続ける。

首相在任中の不完全燃焼を抱きつつ、平和外交と政治浄化を抛り所に、権勢を誇る田中とその派閥と対峙し続けた元宰相の行動の軌跡を、本資料は詳らかにしている。いわゆる「角栄本」が氾濫する時勢において、角栄のライバルの視点から、往時の政治を見直す必要性は一層高まっている。



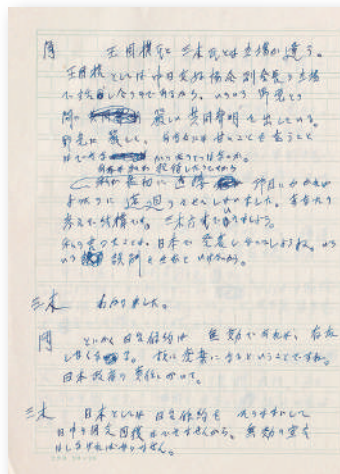
「三木元総理・パルメ首相会談」
1984年8月14日

日米関係

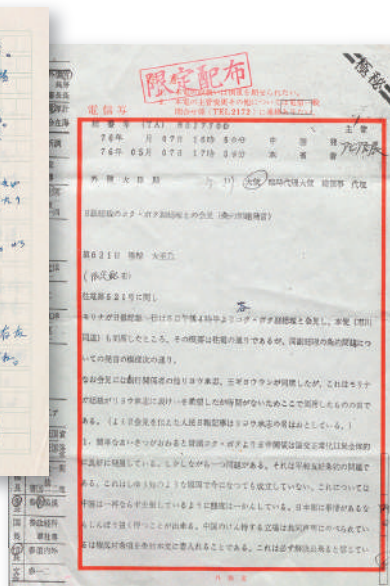


「ミヤザワ大臣、キッシンジャー
長官会談（記録）」1976年6月21日

日中関係

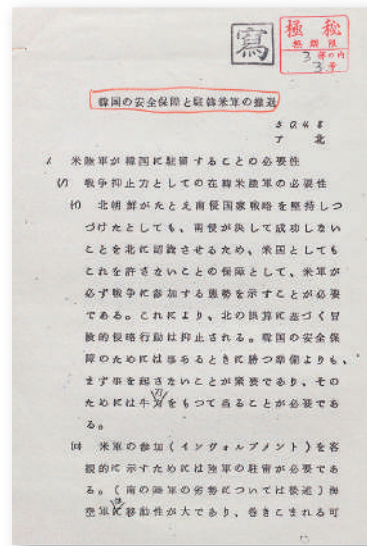


（三木武夫・周恩来会談記録）



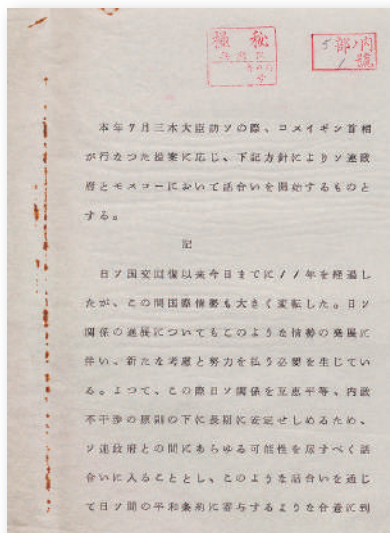
「日銀総裁のkok・ボク副総理との会見
（条約問題発言）」1976年5月7日

朝鮮半島情勢



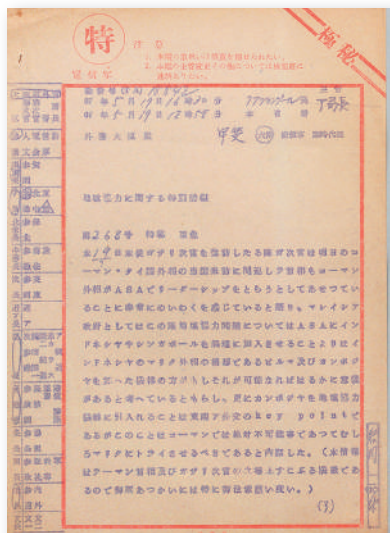
「韓国の安全保障と駐韓米軍の撤退」
アジア局北東アジア課、
1975年4月8日

日ソ関係



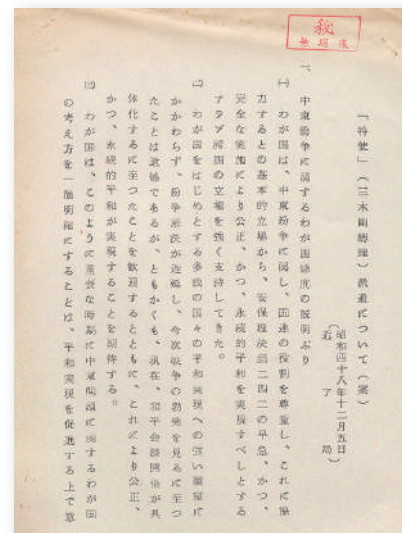
〔北方領土交渉方針〕1967年

東南アジア



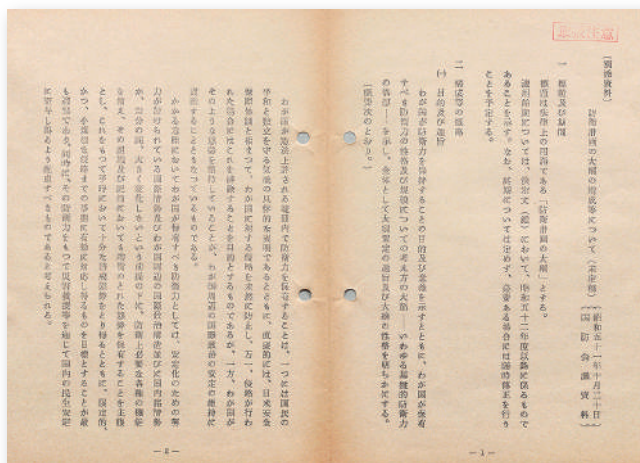
「地域協力に関する特別情報」
1967年5月19日

中東 / 石油危機



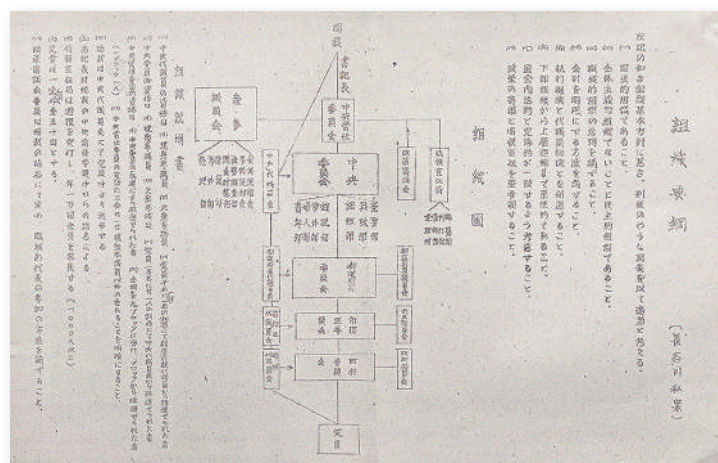
「特使」（三木副総理）派遣について（案）」
近ア局、1973年12月5日

安全保障・防衛問題



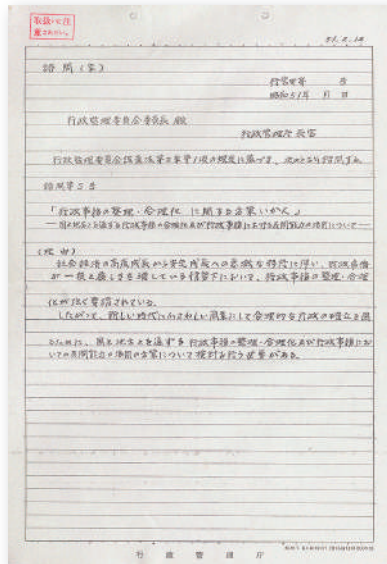
「（別紙資料）防衛計画の大綱の構成等について（未定稿）」
1976年10月20日

改進黨関係



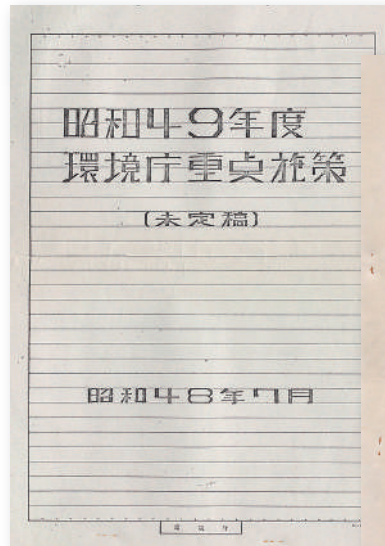
〔改進黨 組織要綱案〕

行財政改革

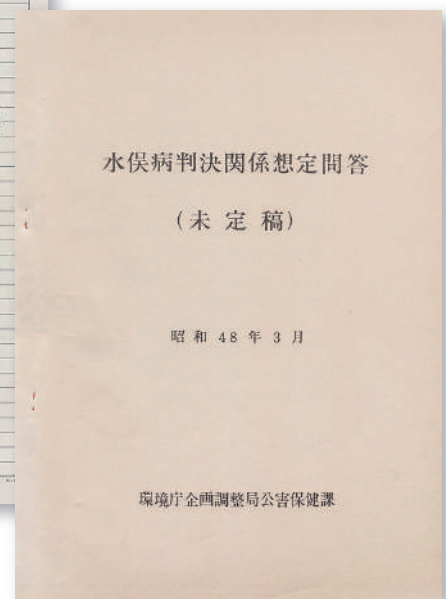


「諮問 (案)」1976 年 2 月 12 日
 (「地方行財政について (行政改革)」所収)

公害・環境問題

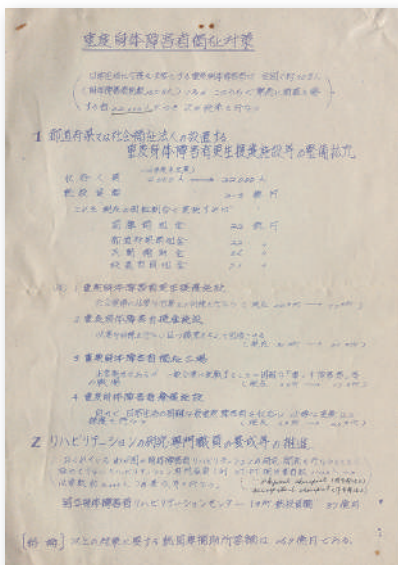


「昭和 49 年度環境庁重点施策 (未定稿)」1973 年 7 月



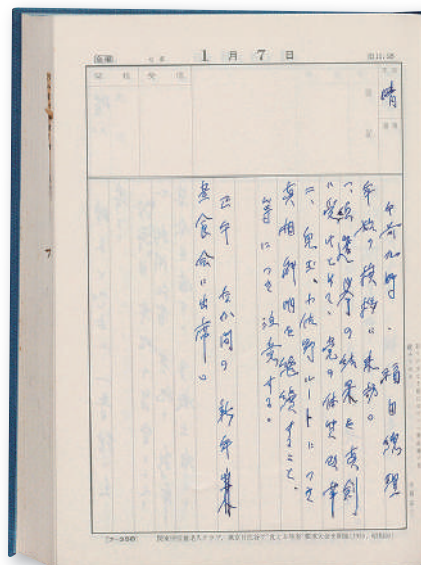
「水俣病判決関係想定問答 (未定稿)」
 環境庁企画調整局公害保健課、1973 年 3 月

社会保障・社会福祉



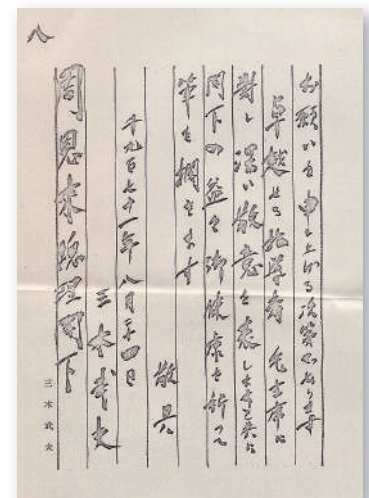
「重度身体障害者福祉対策」

日記



三木武夫自筆日記 (1977 年)

書簡



周恩来宛書簡コピー、1971 年 8 月 24 日

オンライン版 三木武夫関係資料

戦前の三十歳での議員当選にはじまり、自民党幹事長・政調会長など党内の要職をつとめ、経済企画庁長官、科学技術庁長官、通産大臣、外務大臣、副総理兼環境庁長官を歴任、第 66 代内閣総理大臣をつとめた三木武夫 (1907 ~ 1988) が残した一大文書群。

<収録トピック例>

- 第一部：改進黨結成、池田総理訪米、三木外務大臣訪米、佐藤総理訪米、小笠原・沖縄返還交渉、三木・周恩来会談、日韓定期閣僚会議、ヴェトナム戦争、東南アジア開発閣僚会議、ASPAC
- 第二部：田中総理訪米、日中国交回復、石油危機・三木中東特使、四次防関係、日本列島改造、水俣病関係
- 第三部：三木総理訪米、日中平和友好条約締結交渉、ランブイエ・サンファンサミット、核拡散防止条約 (NPT)、「防衛計画の大綱」、政治資金規正法改正・公職選挙法改正、独占禁止法改正、スト権スト、ライフサイクル計画、ロッキード問題
- 第四部：「選挙浄化特別措置法要綱」関連、国際軍縮促進議員連盟、ブランド委員会、パルメ委員会、サミット関係

オンライン版 三木武夫関係資料

編集：明治大学史資料センター

解題：信夫隆司（日本大学教授）、村上一博（明治大学教授）、山泉進（明治大学名誉教授）、小西徳應（明治大学教授）

全四部 ￥2,400,000（税別）

プラットフォーム：J-DAC ジャパン デジタル アーカイブズ センター

完全買切型（ご購入後のプラットフォーム利用料、年間維持費用は不要です）

<1ヶ月の無料トライアル受付中、お申し込みは kenkyushien@maruzen.co.jp まで>

内容構成 / 分売価格

第一部 池田勇人・佐藤栄作内閣期（1960年～72年）

価格 ￥600,000（税別）

池田・佐藤内閣期の資料を中心に、戦前から岸内閣期までの資料も収録。池田訪米記録や小笠原・沖縄返還交渉の極秘資料、1972年4月の三木中国訪問時の周恩来との会談資料も含む。ヴェトナム戦争をはじめ当時のインドシナ情勢をつたえる外交資料も充実している。

第二部 田中角栄内閣期（1972年～74年）

価格 ￥500,000（税別）

石油危機、それを受けて三木が派遣された中東特使関係の資料を収録。田中内閣期の環境庁長官をつとめたことを反映し、水俣病をはじめ公害・環境問題関連の資料も充実している。四次防衛関係資料や日本列島改造計画関連の資料も含む。

第三部 内閣総理大臣期（1974年～76年）

価格 ￥800,000（税別）

政界を揺るがしたロッキード事件の極秘資料、初のサミットとなるランブイエ、続くサンファン・サミットの資料や、三木・フォード会談資料を収録。独占禁止法改正、政治資金規正法改正、日中平和友好条約締結交渉や朝鮮半島情勢、核拡散防止条約（NPT）批准問題、「防衛計画の大綱」関連の資料も含む。

第四部 総理退任以後（1976年～88年）

価格 ￥500,000（税別）

総理退任後も、派閥の領袖として影響力を保持した三木。福田・大平内閣期の外遊資料やサミット関連に加え、大平首相に提出した「選挙浄化特別措置法要綱」に代表される政治改革・政治倫理関連、国際軍縮促進議員連盟会長に就任するなど、晩年に注力した軍縮・平和関連資料も充実。

*収録内容は予告なく変更の可能性がございます。

好評発売中

近現代史料データベースは横断検索が可能です

オンライン版 大来佐武郎関係文書 日記・手帳・ノート 1936-1993

価格 ￥400,000（税別）

戦後を代表するエコノミスト・経済官僚、大来佐武郎（1914-1993）の未公開の日記、手帳、ノート 200冊以上を収録。1930年代から90年代まで、大来がそれぞれの要職で参加した国内外の会議要録をはじめ、海外出張時の詳細なスケジュール、各国要人との会談内容等が丹念に記された第一級の史料群。

オンライン版 楠田實資料（佐藤栄作官邸文書）

全2部 価格 ￥800,000（税別）

オンライン版 大平正芳関係文書

価格 ￥400,000（税別）

オンライン版 矢部貞治関係文書（原本：政策研究大学院大学図書館）

価格 ￥400,000（税別）

オンライン版 矢部貞治関係文書 補遺（原本：矢部家所蔵、衆議院憲政記念館寄託）

価格 ￥270,000（税別）

戦後日本の経済、政治、国際関係を照らす新史料

オンライン版

大来佐武郎関係文書

日記・手帳・ノート 1936-1993

原本：政策研究大学院大学図書館所蔵

解題：浅井良夫（成城大学名誉教授）



戦後を代表するエコノミスト・経済官僚、大来佐武郎（1914-1993）の未公刊の日記、手帳、ノート 200 冊以上を収録。1930 年代から 90 年代まで、大来がそれぞれの要職で参加した国内外の会議要録をはじめ、海外出張時の詳細なスケジュール、各国要人との会談内容等が丹念に記された第一級の史料群。

出版・発売元：丸善雄松堂株式会社

「政策の巨人」の活動に迫る

政策研究大学院大学教授 飯尾 潤

後世の人は代表的な肩書きで人物を判断しがちである。大来佐武郎は外務大臣を務めたから、政治家だったと思われるかもしれない。しかし、調べれば、逓信省、大東亜省、外務省、経済安定本部、経済企画庁などで活躍し、大来は官庁エコノミストの代表と目されていたことがわかる。退官後は、幅広い国際的人脈をもとに国際経済協力や地球環境問題などに取り組み、日本を代表する知識人となった。外務大臣になったときも、民間の知識人が大臣になったと認識されていたのである。

大来佐武郎は、まさに「政策の巨人」である。その大来が残したノート類がオンラインで公開されることになった。大物官僚や政治家が残す記録は、宝を探し出す楽しみ

があるとはいえ、不揃いの記録であることが多い。ところが大来は、几帳面な性格もあって、時期的にも一貫した記録を、仕事のテーマによって区別したファイルの形で残している。その意味で、原資料になじみの薄い研究者にとっても使いやすい資料だといえよう。また、国際会議などに出席したときには、会議のプログラムや出席者一覧も同じノートに綴じ込み、各人の発言が丁寧にメモされるなど、その場を彷彿とさせる豊富な情報量のノートが多数存在する。これなど、なかなか運営の様子がわからない会議の実態を知りたい研究者にとっては宝の山といえよう。昭和期の政策問題について調べるのに必見の資料が便利な形で公開されることを喜ぶたい。

大来佐武郎 — 国際派エコノミスト

早稲田大学教授 池尾 愛子

経済学の歴史を眺めるとき、エコノミストという職業の社会的位置づけが高まってくるのは第二次世界大戦中とそれ以降のことであった。大戦後、アジア・アフリカで多くの国々が独立し、それに伴って国際経済会議が増え、加えて、国際通貨基金（IMF）、世界銀行、経済協力開発機構（OECD）などの国際機関が国際経済関係構築の上で大きな役割を果たすようになってきた。こうしたグローバル化の進行とともに、政府エコノミスト集団が誕生したのである。

大来佐武郎は戦中戦後日本の経済官僚集団の一人であり、国際舞台においては「日本の優秀な官僚組織」を代表するエコノミストであった。大来は英語を流暢に話し、アメリカで標準的になった経済学を理解した。後輩官庁エコ

ノミストの故宮崎勇元経済企画庁長官いわく、大来は「つねに日本人の立場に立って海外に対して物をいい、日本の国際的地位の向上に努めた」と同時に、「日本におけるエコノミストの社会的地位を引き上げるのに貢献大なるものがあった」。

大来は経済官庁、民間経済人、学界との協力関係を作り上げ、重要な経済論議が行われた現場の多くにいて、調査と意見調整の両方に努力した。彼は多くの報告書を執筆し、重要な経済計画を起草し、何よりも重要なことに自らの行動についてかなり正確に書き記した。だからこそ、公表資料に到る舞台裏が気にかかることがある。今回の関係文書が光をあててくれることを期待したい。

「一身にして二生を経る」— 日本と世界をまたいだ時代の先駆者

東京大学教授 佐藤 仁

日本の過去 200 年を振り返って、「時代の転換期」とはつきりいえるのは明治維新と第二次大戦の終戦であろう。それぞれの転換期には、まさに新旧二つの時代を駆け抜けた知的リーダーの存在があった。明治維新をけん引した一人である福沢諭吉は、つい先日まで漢学者であった自分が、突如として洋学者になった経験を振り返り、あたかも「一身にして二生を経る」と総括している。

大来佐武郎は、戦前から戦後への転換をけん引した人物であるが、その本領が発揮されたのは戦後日本の国際化の文脈においてであった。大来の人生は国内経済の立て直しに尽力した 1950 年代前半までの時期と、発展途上国の開発や援助に力点を移動する 1950 年代後半以降で大きく転換する。経済安定本部に務めていた時代の彼の関心は、日本経済の自立化であった。1955 年に経済審議庁（のちの

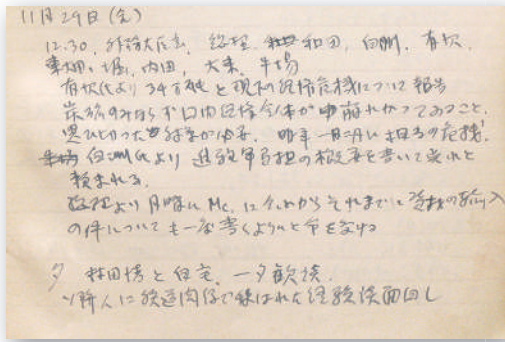
経済企画庁）の初代経済協力室長になってからは、日本の国際的な関与へと関心が広がる。

福沢は言った。「二生を経る」とは単に二つの世界の知識を吸収することではない。むしろ、二つの知識が互いに照らし合わせられて、より確実なものになる点が重要だ。大来も世界を知っていたゆえに日本を憂い、日本を知っていたからこそ世界で仕事をすることができた。この複眼思考ができる人材を歴史の偶然に任せるのではなく、教育機関たる大学が積極的に生み出すにはどうしたらよいか。このたび公開されるデジタルアーカイブは、この悩みに答えるアイディアの宝庫である。大来の資源政策や開発援助に関する「二生」を辿ることのできる資料が身近になったことで、私自身も研究を大きく前に進められそうだと今からワクワクしている。

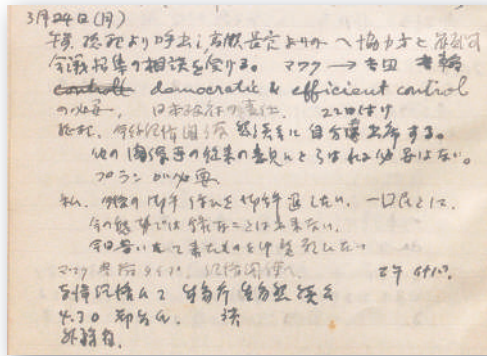
国内経済から国際関係まで ― 多岐にわたる活動の記録

占 領 期

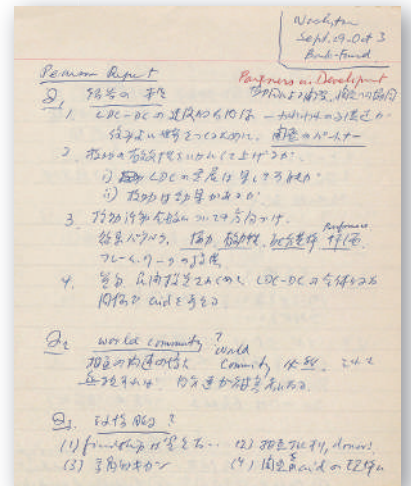
開 発 援 助



1946年11月29日条〔有沢氏より(出炭)
3千万トンと現下の経済危機について報告…〕
(「日記帳 1945～49」所収)



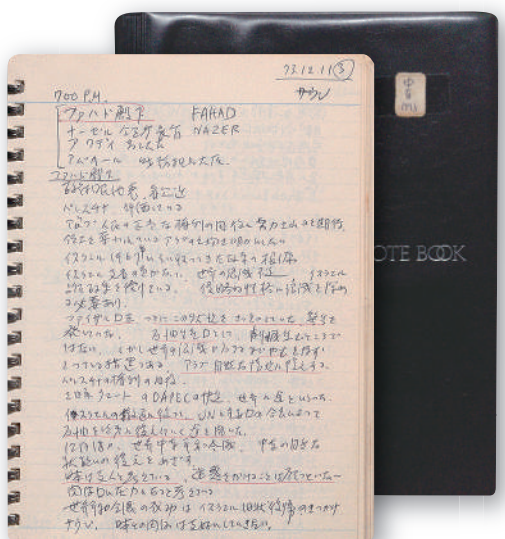
1947年3月24日条〔午前、総理より呼出し…〕
(「日記帳 1945～49」所収)



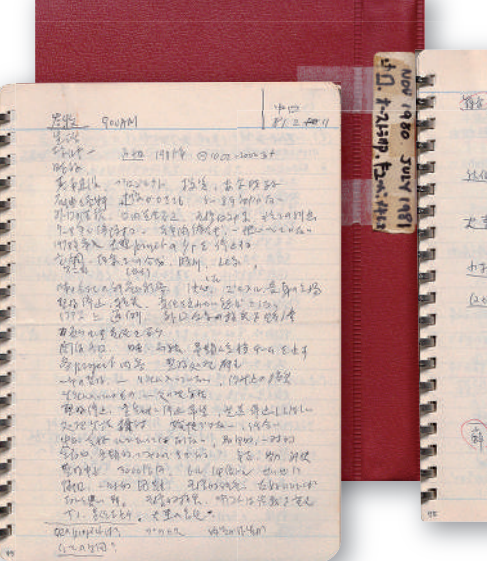
1969年9月 国際開発委員会
(ピアソン委員会) (「1969」所収)

中 東 ／ 石 油 危 機

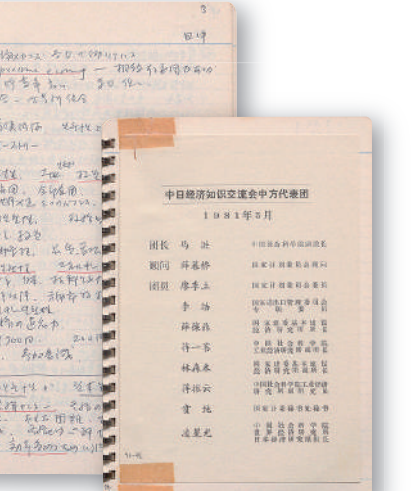
日 中 関 係



1973年12月 三木中東特使・ファハド副首相会談要録
(「中東 1973」所収)

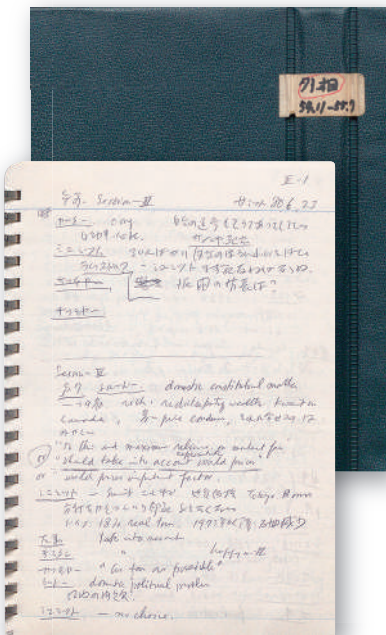


左：1981年2月 大来・谷牧副首相会談要録／右：1981年5月 日中経済知識交流会
(「Nov1980 July1981 中国、オーストラリア、キューバ、メキシコ」所収)

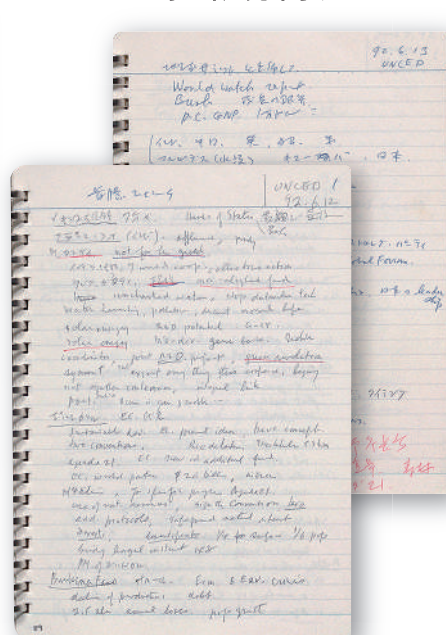


ヴェネチア・サミット

地 球 環 境 問 題



1980年6月 ヴェネチア・サミット
(「外相 54.11-55.7」所収)



1992年6月 国連環境開発会議
(地球サミット) (資料番号 23-112 所収)

オンライン版

大来佐武郎関係文書

日記・手帳・ノート 1936-1993

大来佐武郎(1914-1993)が半世紀にわたり残した日記・手帳・ノートを完全収録。1930年代から90年代まで、大来が要職に就いていた全時代をカバーし、その数は200冊以上にのぼる。大来がそれぞれの要職で参加した国内外の会議要録をはじめ、生涯300回以上に及んだ海外出張のスケジュールや各国要人との会談内容等が詳細に記録された第一級の史料である。大来は長期にわたり多方面で活躍したため、戦後日本の経済、外交に関する内容はもとより、人口、エネルギー、南北問題、ODA、地球環境問題など、多岐にわたるテーマを含んでいる。長年遺族の手許で保管され、近年、政策研究大学院大学図書館に正式に寄贈された。

「近現代史料データベース」の他のコンテンツとの横断検索も可能。

オンライン版 大来佐武郎関係文書

日記・手帳・ノート 1936-1993

原本：政策研究大学院大学図書館所蔵 解題：浅井良夫（成城大学名誉教授）

価格 ￥400,000（税別）

プラットフォーム：J-DAC ジャパン デジタル アーカイブズ センター
完全買切型（ご購入後のプラットフォーム利用料、年間維持費用は不要です）
<1ヶ月の無料トライアル受付中、お申し込みは kenkyushien@maruzen.co.jp まで>

収 録 内 容

大来佐武郎日記・手帳・ノート 1936（昭和11）年～1993（平成5）年

好評発売中

近現代史料データベースは横断検索が可能です

オンライン版 三木武夫関係資料

全四部 価格 ￥2,400,000（税別）

第66代内閣総理大臣をつとめた三木武夫（1907～1988）が残した膨大な文書群。戦前の三十歳での議員当選にはじまり、自民党幹事長・政調会長など党内の要職をつとめ、経済企画庁長官、通産大臣、外務大臣、副総理兼環境庁長官も歴任した三木。本資料は、三木が残した、国会答弁資料、外交資料、省庁・党内資料など各種政策資料、総裁選・選挙関連資料、講演・演説原稿、日記・手帳・書簡・メモなど大量の一次史料で構成され、まさに一級の史料群である。

オンライン版 楠田實資料（佐藤栄作官邸文書）

全二部 価格 ￥800,000（税別）

戦後最長の佐藤栄作政権（1964～1972）を支えた首席秘書官 楠田實が残した未公開官邸資料。外交から内政まで第一級の極秘資料で構成される、事実上の「佐藤栄作文書」。

オンライン版 大平正芳関係文書

価格 ￥400,000（税別）

第68・69代内閣総理大臣をつとめた大平正芳（1910～1980）が残した膨大な文書群。大平正芳自筆の日記・手帳から、書簡、外務省や通産省などの官庁資料、国会答弁・演説用の原稿資料、選挙関係資料、さらには大平の回想録執筆にあたって行われた政財官の重要人物へのインタビュー記録など、膨大かつ多様な原史料で構成。

オンライン版 矢部貞治関係文書

原本：政策研究大学院大学図書館所蔵

価格 ￥400,000（税別）

戦前戦後を通じて現実政治に深く関わった政治学者・矢部貞治（1902～1967）の旧蔵資料。矢部の自筆資料や書簡のほか、戦前から戦後にかけて関わった諸団体——昭和研究会、海軍省・海軍大学校、憲法調査会、行政審議会、公安審査委員会、選挙制度審議会、明治百年記念準備委員会などの内部資料で構成。

オンライン版 矢部貞治関係文書 補遺

原本：矢部家所蔵、衆議院憲政記念館寄託

価格 ￥270,000（税別）

大正10年～昭和42年までの『矢部貞治日記』の原本やノート等の自筆資料のほか、矢部の手元に残された戦前・戦中の原史料群も収録。

有沢広巳旧蔵

オンライン版

社会政策・エネルギー政策関係資料集

第一部 社会政策関係資料

編集：宮崎 忠 恒 茨城大学准教授 原本：東京大学経済学図書館所蔵



戦後の経済政策に多大な影響を与えた経済学者、有沢広巳（1896～1988）が残した、多岐にわたる政策関係の一次史料群。第一部では、50年代から80年代までの社会政策関連の審議会資料を中心に収録、また、戦時経済および戦後復興期の経済政策にかかわる、経済安定本部をはじめとした各種資料や、国土総合開発審議会などの資料もあわせて収録する。戦後日本の社会政策史を実証的に研究する上で、不可欠な史料群である。

出版・発売元：丸善雄松堂株式会社

社会政策の未来を構想するために不可欠な史料群

日本女子大学名誉教授 岩田 正美

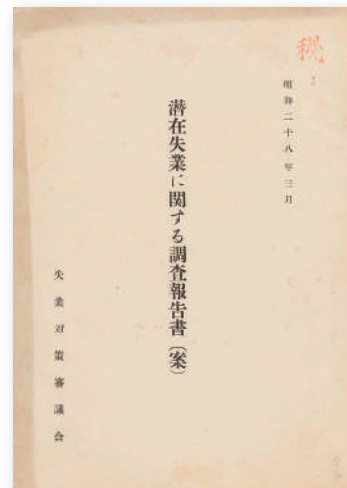
有沢広巳氏は、戦後日本の多岐にわたる経済・社会政策の策定に中心的に関わってきた学者として知られているが、今回その社会政策関連の史料が「近現代史料データベース」に収録されることになった。審議会資料、調査報告、研究会議事概要、さらに、ごく少数ではあるが戦時期の自筆原稿まで含まれるそうである。

有沢氏の関わった戦後日本の社会政策の軌跡は、一方で英国ベヴァリッジ報告で描かれた福祉国家の理想を日本なりに模索しようとした過程であり、他方で焼土の中に失業者・貧困者が蔓延し、食糧や仕事を求めるデモが続いた戦後日本の現実や、その後の経済の「二重構造」から突き上げられて、相互に矛盾した政策をパッチワークしつつ凌いだ過程でもあった。この理想と現実の中で、どのような調査や議論が行われていったのかを、有沢氏の残された、きわめて長いスパンの史料であらためて振り返ることは、今日の社会政策の方向を議論する上でも有意義なことである。

とりわけ、1990年代半ば以降、社会政策論として再登場した失業問題や最低賃金論を深める上で、近年ではあまり関心をもたれてこなかった失業対策審議会や最低賃金審議会などの議論を再検討する作業が不可欠

であろう。本来「半失業者」であった日雇労働者の健康保険や失業保険の創設がなぜ行われたのか、あるいは失業対策事業とは何であったのかを問い直す必要もある。「二重構造論」と今日の正規・非正規問題などの格差論は異なったものであるが、今日においても「二重構造論」的アプローチが有効かもしれない。

さらに、国民皆保険皆年金体制をいかに持続させるかという今日的課題についても、なぜこのような「皆保険皆年金」が構想されたかに遡った議論も必要とされている。少子高齢化などの人口動態だけでなく、社会政策が刻んできた歴史のリズムに耳を傾けつつ、未来を構想することが大事ではなかろうか。



「潜在失業に関する調査報告書（案）」失業対策審議会、1953年3月

日本の福祉国家の本質と内実を照らす資料集

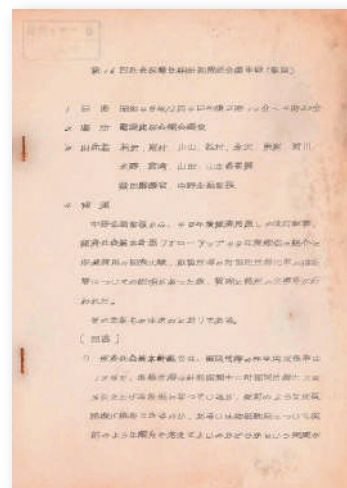
大阪市立大学名誉教授・愛知学院大学教授 玉井 金五

わが国の社会政策研究は一世紀以上の歴史と伝統を有する分野であり、社会科学史上において顕著な成果を生み出してきた。数多の時代において重大な社会問題と格闘してきたなかで、とくに終戦直後から高度経済成長期に至る時期は、社会政策の理論と実践において黄金期ともいえる出来事が集中した。昭和20年代に華々しく展開された「社会政策本質論争」、それを経ての「社会政策から労働問題へ」といった一連の研究系譜は、当時の労働運動の進展と呼応して、わが国の労資関係の針路を規定するかの如く影響を及ぼした。まさに、社会政策と労働運動の関係性が極めて注目された画期を形成したのである。

そうした激動期において、行政面の審議会活動を中心に活躍したのが有沢広巳である。今回の資料集は有沢が所蔵した社会政策関係分の刊行であり、昭和20年代から30年代、40年代にかけての実像を映し出すうえで実に大きな価値を持っている。著しい混乱期を乗り越えて安定期に向かうためには、国民に雇用と生活の保障を行わなければならない。言い換えれば、長年わが国を支配してきた「貧困」と「失業」を打破することが求められるが、そのためには新しい社会政策を打ち立てていく必要がある。そうした渦中において、審議会活動という

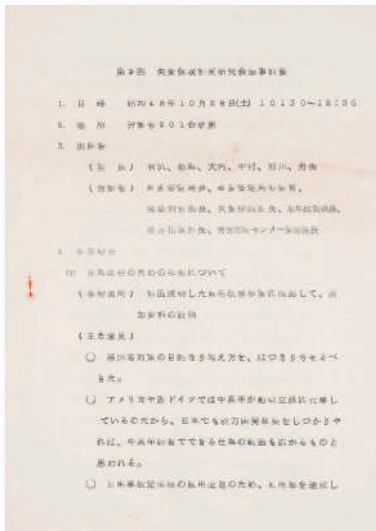
場を通じてであるが、身を投じたのが有沢であった。

昭和30年代に入ると、日本は本格的に福祉国家建設を唱えるようになる。その柱が「完全雇用」と「社会保障」の確立というのであれば、有沢に関わった審議会はその可能性を追求し、実現への途を模索するものであった。日本がいつ福祉国家体制に突入したのかについては論争がある。しかし、それが高度経済成長期を軸にした時期であったということにはさほど異論はない。日本の福祉国家の本質と内実を根底において見極めるためにも、本資料集の徹底した解読は避けて通ることができない。現在、東アジア各国を中心として、国際的に日本の福祉国家形成史に強い関心が寄せられているので、なおさらであろう。



「第16回社会保障長期計画懇談会議事録（要旨）」1973年12月4日

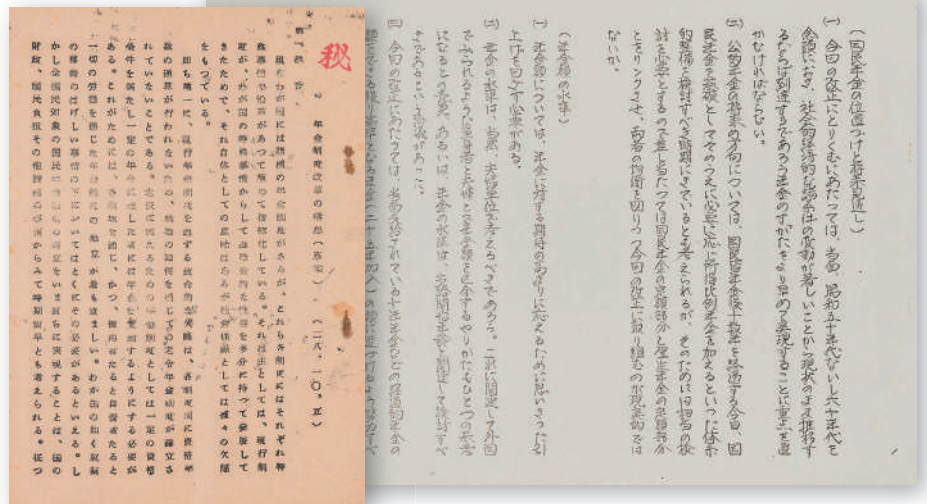
失業問題



「第9回失業保険制度研究会議事概要」
1973年10月28日

戦後社会政策の軌跡を原資料で辿る

年金制度



「年金制度改革の構想（草案）」
1953年10月5日

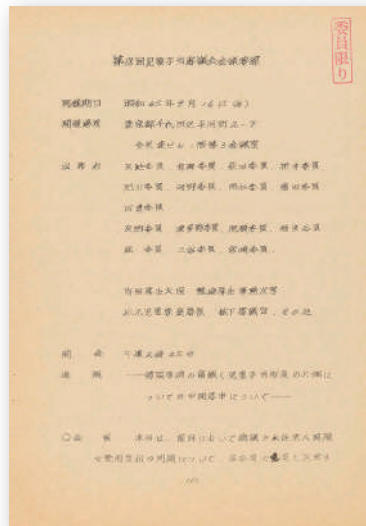
「国民年金の位置づけと将来見通し」

最低賃金



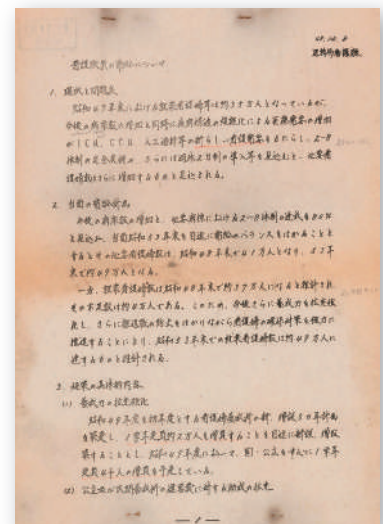
「中央最低賃金審議会第49回会議議事録」
1970年12月23日

児童福祉



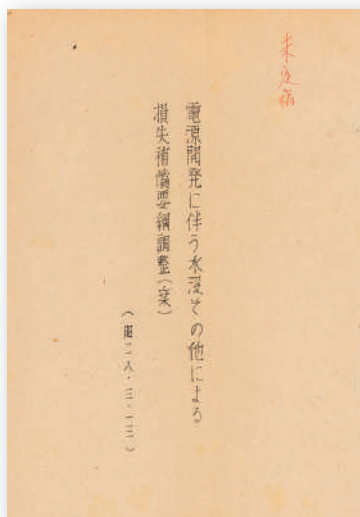
「第18回児童手当審議会会議要録」
1970年9月16日

医療・看護



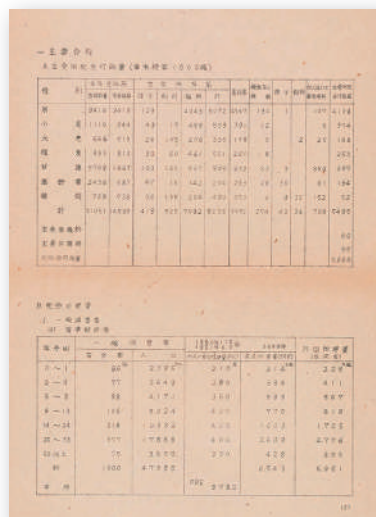
「看護職員の需給について」
医務局看護課、1973年12月8日

国土開発



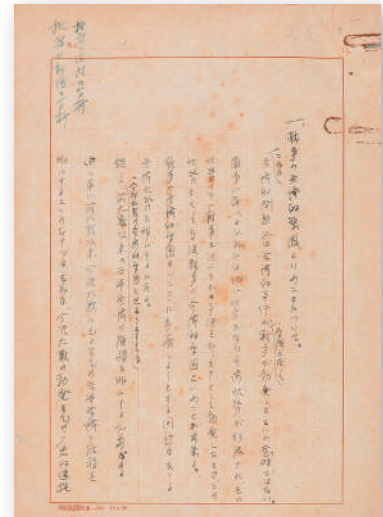
「電源開発に伴う水没その他のによる損失補償要綱調整（案）」1953年3月13日

復興期経済



「昭和二五、二六年生活物資需給の見通し」
経済復興計画室農林班、1949年11月2日

自筆原稿



「一、戦争の経済的原因といふことについて。…」

オンライン版 社会政策・エネルギー政策関係資料集

第一部 社会政策関係資料

編集：宮崎忠恒 茨城大学准教授 原本：東京大学経済学図書館所蔵

価格 ￥450,000 (税別)

プラットフォーム：J-DAC ジャパン デジタル アーカイブズ センター
完全買切型（ご購入後のプラットフォーム利用料、年間維持費用は不要です）

<1ヶ月の無料トライアル受付中、お申し込みは kenkyushien@maruzen.co.jp まで>

収録審議会・懇談会例

社会保障制度審議会	雇用問題政策会議	産炭地域振興審議会
社会保障長期計画懇談会	失業保険制度研究会	物価安定政策会議
国民年金審議会	中央賃金審議会	物価問題懇談会
児童手当審議会	中央最低賃金審議会	統計審議会
失業対策審議会	中小企業政策審議会	
雇用審議会	国土総合開発審議会	

<続刊予定>

続刊予定の第二部では、有沢自身が立案した「傾斜生産方式」で知られる石炭関係や、60年代に「エネルギー革命」を迎えた石油政策、創設期から委員会に加わり、後に委員長代理もつとめた原子力委員会など、戦後のエネルギー政策関連の資料を収録する予定である。

*収録内容は予告なく変更の可能性がございます。

好評発売中

近現代史料データベースは横断検索が可能です

オンライン版 大来佐武郎関係文書 日記・手帳・ノート 1936-1993

価格 ￥400,000 (税別)

戦後を代表するエコノミスト・経済官僚、大来佐武郎（1914-1993）の未公開の日記、手帳、ノート 200冊以上を収録。1930年代から90年代まで、大来がそれぞれの要職で参加した国内外の会議要録をはじめ、海外出張時の詳細なスケジュール、各国要人との会談内容等が丹念に記された第一級の史料群。

オンライン版 楠田實資料(佐藤栄作官邸文書)

全二部 価格 ￥800,000 (税別)

オンライン版 大平正芳関係文書

価格 ￥400,000 (税別)

オンライン版 矢部貞治関係文書 (原本：政策研究大学院大学図書館)

価格 ￥400,000 (税別)

オンライン版 矢部貞治関係文書 補遺 (原本：矢部家所蔵、衆議院憲政記念館寄託) 価格 ￥270,000 (税別)

オンライン版 三木武夫関係資料

全四部 価格 ￥2,400,000 (税別)

歴史的事件の公式裁判記録を収録。時代の転換点に迫る第一級資料

オンライン版 二・二六事件 東京陸軍軍法会議録

監修・解説：筒井清忠（帝京大学文学部長）

原本：国立公文書館所蔵

刊行にあたって

帝京大学文学部長 筒井清忠

二・二六事件についての史料の探求と研究の進展状況については拙著『二・二六事件と青年将校』（吉川弘文館、2014 年）巻末に詳しく著したところであるが、多くの人の努力によって、青年将校・襲撃された政府高官・関係者や憲兵・警察等捜査側の多くの記録が公刊されてきている。しかし、一番重要で史料的に信頼できるのは軍法会議の記録である。これは長い間発見されず、空襲で焼けたので存在しないと公言する人までいた。ところが、1990 年代初めに東京地方検察庁に存在することが確認され、曲折を経て国立公文書館に移管後、今回の出版に至った。

二・二六事件は近代日本史上唯一最大のクーデター事件である。それだけに今日まで多くの風聞が流され、不正確な著作も書かれてきたが、それでも正確な史料研究は着実に積み重ねられて来ており、前掲拙著はそれらをまとめたものである。

しかし、宮城占拠問題、木戸幸一内大臣秘書官長ら天皇周辺の動き、真崎甚三郎大将や石原莞爾大佐など陸軍中枢の立場、海軍の動向、民間の北一輝・西田税との関係、鎮圧軍の向背、ソ連など外国との関係など、いまだ未解明の部分も少なくない。軍法会議の捜査は、これだけのクーデター事件に逢着した軍がその持てる力を全面的に駆使して行ったため綿密・詳細にわたっており、これ以上調べようがないと言っても過言ではないほどである。したがって、今回の公刊によりそれらの解明は画期的に進むであろう。

それでもなお軍が隠蔽しようとしたこともあるとも思われ、それも含めた謎解き・事件の真相の解明はなお残されている。オンライン版の刊行により、本資料群が広く開かれることが今回の出版の最大の意義ともいえるかもしれない。多くの人に利用されることで、昭和史、否近代日本史上最大の謎が解明されていくことを期待したい。



赤坂山王ホテルに籠城の決起部隊（毎日新聞社提供）

昭和 11 年、陸軍の青年将校らが起こした二・二六事件。弁護人なし、非公開で行われた軍法会議の記録を収録。事件に関わった者の捜査、予審、公訴、公判の各段階の書類が網羅された膨大な原史料群。歴史の転換点とも言われる事件及び裁判の全貌を明らかにする第一級資料。

出版・発売元：丸善雄松堂株式会社

非公開の軍法会議では何が争われていたのか

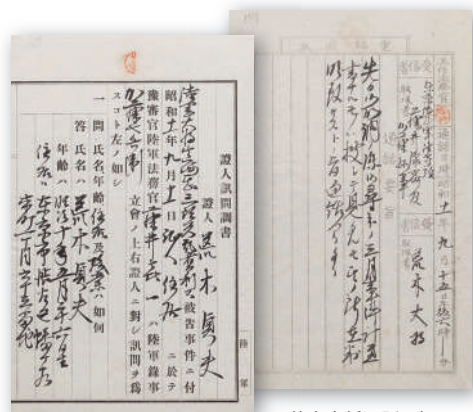
東京大学教授 加藤 陽子

今回公開の文書は、かねて東京地方検察庁が保管し、研究に限って閲覧が許されてきた記録 全 67 冊である。2011 年の公文書管理法施行、14 年の内閣総理大臣・法務大臣間協定を受け、16 年に国立公文書館に移管された。東京地検保管時には複写禁止で、閲覧不許可の文書も 7 冊あったことを思えば、今回の全面公開はまことに喜ばしい限りだ。

これまでも部分的な紹介はあった。判決書を翻刻した伊藤隆・北博昭共編『新訂 二・二六事件 判決と証拠』(毎日新聞社、1995 年)や、蹶起将校らの公判調書を翻刻した池田俊彦編『二・二六事件裁判記録 蹶起将校公判廷』(原書房、1998 年)である。また、軍法会議で主席検察官を務めた匂坂春平の遺した史料を翻刻した原秀男ほか編『検察秘録 二・二六事件』全四巻(角川書店、1989 年～91 年)もある。それ以前の、憲兵調書・判士メモ・戒厳司令部記録等を採録した、林茂ほか編『二・二六事件秘録』全四巻(小学館、1971～72 年)、松本清張・藤井康栄編『二・二六事件＝研究資料』全三巻(文藝春秋、1976 年～93 年)なども合わせて見るべき史料だろう。

しかし今回のものは特設軍法会議の公式記録であり、これで捜査・予審・公訴・公判まで全段階の史料が揃ったことになる。二・二六事件の研究史の意義や新事実については筒井清忠氏の解説に譲り、ここでは事件の事実そのものと裁判で

闘われた争点とのズレに読者の注意を喚起しておきたい。五・一五事件とは異なり二・二六事件は、民間人と軍人が同一の特設軍法会議で、一審・非公開・弁護人なしで裁かれた。五・一五事件の裁判では、将校のテロを農村貧窮という国家非常時への緊急対処だとして擁護もできた。だが、二・二六事件の裁判では、事件当初に陸軍首脳が将校の蹶起を容認してしまった事実を隠蔽するため、将校の弁明を容れない厳罰方針が採られた。そのような法廷で将校はいかなる弁法で自らの立場を説明していたのか。法廷闘争の全貌が解明される日も近いだろう。



荒木貞夫証人証人調書
(東京陸軍軍法会議予審官陸軍
法務官、昭和 11 年 9 月 11 日)

荒木大将通話要旨
(昭和 11 年 9 月 15 日)

研究の飛躍的發展に期待

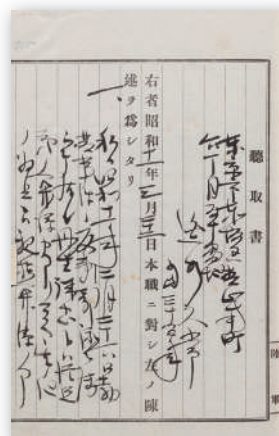
京都大学教授 奈良岡 聰智

二・二六事件の真相は、第二次世界大戦後に関係者が重かった口を開き、多様な史料が発見・公開されることによって、次第に明らかになってきた。1950 年代には、河野司編『二・二六事件』(日本週報社)が出版され、青年将校たちの遺書が初めて世に出た。60 - 70 年代には、重要資料を収めた高橋正衛他編『現代史資料 国家主義運動 1-3』(みすず書房)が刊行され、事件の経緯を相当程度当時の一次史料で追うことが可能になった。

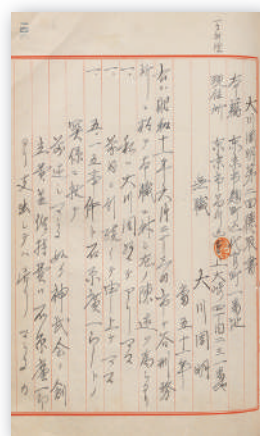
その後も地道な史料の発掘が続いたが、特筆すべきは、存在しないと考えられていた裁判資料が東京地検で発見されたことである。このうち判決部分は、伊藤隆・北博昭共編『新訂 二・二六事件 判決と証拠』(毎日新聞社、1995 年)として刊行されたが、資料全体にアクセスすることは困難であった。このたび、国立公文書館に移管された同資料がオンライン版として刊行されたことにより、資料の全貌を把握し、様々な論点を詳細に検討することが可能になった。まことに画期的なことであり、この壮挙に敬意と喜びを表する次第である。

オンラインでの史料公開・出版は、世界的な流れであるが、近年日本近現代史の分野においても、重要史料のオンライン出版が相次いでいる。デジタル化された史料は、大量閲覧、数量的分析、画像の拡大・加工による細部の検討、他の一次史料との照合などに便利で、確実に歴史研究のあり方を変え

つつある。本データベースは、プラットフォーム、画像ともに大変利用しやすいように作られており、まさにこうした分析を可能にするものである。目録も充実しており、著名ではない人物に関しても、目録を検索するだけである程度の情報を得ることが可能である。本データベースを駆使し、既存の一次史料を再検討することによって、二・二六事件研究は飛躍的に発展するであろう。多くの人によって広く活用されることを期待したい。

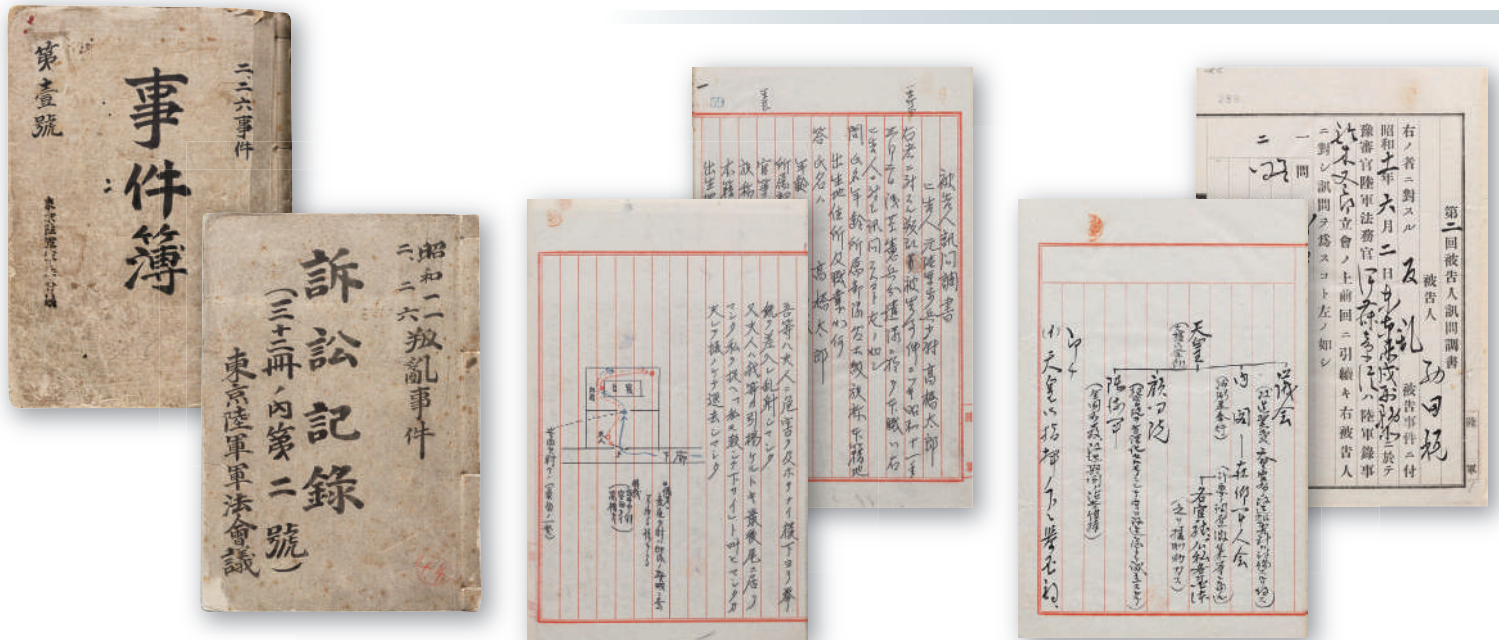


迫水久常聴取書
(東京陸軍軍法会議検察官陸軍法務官、
昭和 11 年 3 月 22 日)



大川周明聴取書〔第二回〕
(東京憲兵隊本部陸軍司法警察官、
昭和 11 年 6 月 23 日)

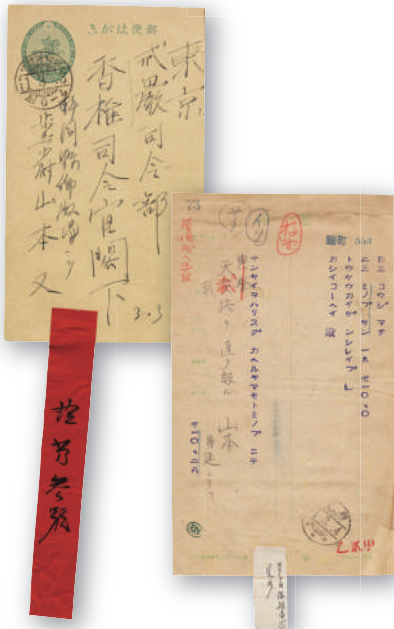
歴史的事件の全貌を明らかにする膨大な原史料群



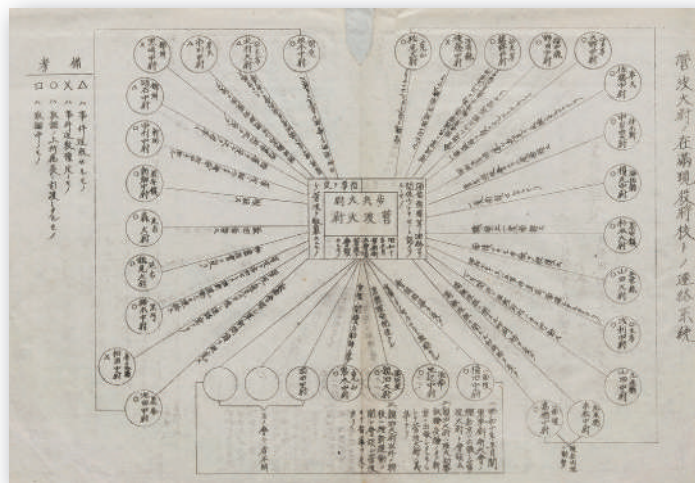
簿冊表紙

高橋太郎被告人訊問調書
(東京憲兵隊本部陸軍司法警察官、
昭和11年3月2日)

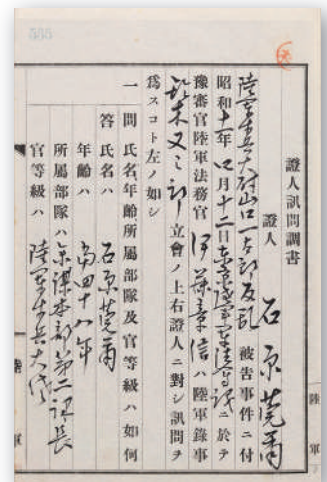
西田税被告人訊問調書〔第二回〕
(東京陸軍軍法會議予審官陸軍法務官、
昭和11年6月2日)



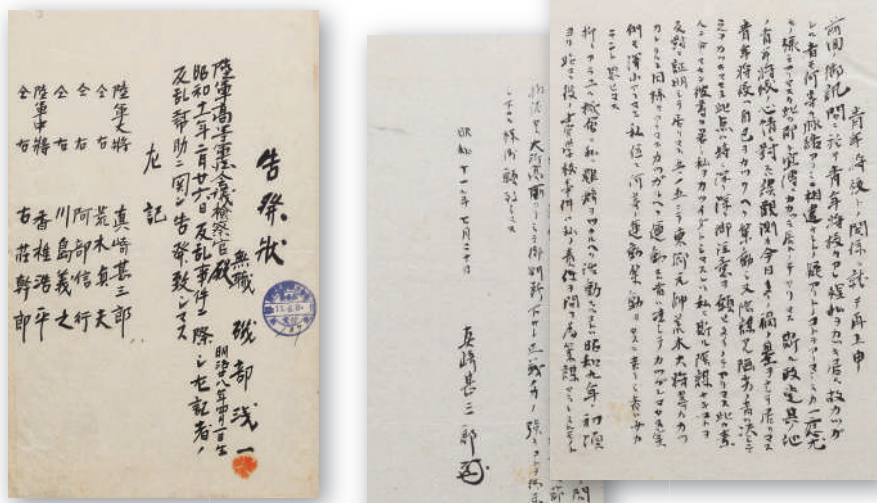
証拠物「戒嚴司令部 香椎浩平宛葉書／電報」



捜査資料「極秘 菅沼大尉の在満現役將校との連絡系統」



石原莞爾証人訊問調書
(東京陸軍軍法會議予審官陸軍
法務官、昭和11年4月12日)



磯部浅一「告発状」

真崎甚三郎「青年将校との関係に就て再上申」
(昭和11年7月20日)

オンライン版

二・二六事件東京陸軍軍法會議録

近代日本史上最大のクーデター事件である二・二六事件の裁判は、一審即決、弁護人なし、非公開の東京陸軍軍法會議で行われた。本データベースでは、東京地検で発見された二・二六事件の軍法會議録全 67 冊を収録予定。事件に関わった者に関する捜査、予審、公訴、公判の各段階の書類が網羅されており、事件及び裁判の全貌を解明する可能性を秘めた掛値なしの一般史料群である。近現代史、政治史、軍事史、社会史はもとより、軍法會議に関するまとまった資料として戦時期の司法行政の面からも注目される。

『二・二六事件とその時代』(ちくま学芸文庫、2006年)や『二・二六事件と青年将校』(吉川弘文館、2014年)、『昭和史講義』(ちくま新書)シリーズの編著者である帝京大学文学部長 筒井清忠教授の監修のもと、詳細な目録、解説を付して刊行する。

「近現代史料データベース」の他のコンテンツとの横断検索も可能。

オンライン版

二・二六事件東京陸軍軍法会議録

監修・解説：筒井清忠（帝京大学文学部長）

原本：国立公文書館所蔵

全二部 ￥600,000（税別）

第一部 ￥300,000（税別） 第二部 ￥300,000（税別）

プラットフォーム：J-DAC ジャパン デジタル アーカイブズ センター
 完全買切型（ご購入後のプラットフォーム利用料、年間維持費用は不要です）
 <1ヶ月の無料トライアル受付中、お申し込みは kenkyushien@maruzen.co.jp まで>

収録内容

◆ 第一部 全体の半数にあたる 32 冊、2,500 件以上の膨大な原史料を収録

香田 清貞	憲兵聴取書・憲兵訊問調書
安藤 輝三	憲兵訊問調書・検察官訊問調書・証拠品目録・予審訊問調書・手記「決行前後の事情並立場心境等につき陳述の補足」
村中 孝次	警察官聴取書・警察官訊問調書・憲兵訊問調書・書簡
磯部 浅一	警察官聴取書・憲兵聴取書・憲兵訊問調書・検察官聴取書
坂井 直	憲兵訊問調書・押収調書・証拠書類・検察官訊問調書・予審訊問調書・手記「現在の心境並に将来に対する希望」
渋谷 善助	憲兵聴取書・憲兵訊問調書・検察官訊問調書・予審訊問調書・手記「本事件に参加するに至りし事情並に爾後の所感念願」
山口 一太郎	憲兵聴取書・憲兵訊問調書・押収捜査調書・検察官訊問調書・捜査報告・意見書・予審訊問調書・公判調書
真崎 甚三郎	憲兵聴取書・仮領置品目録・検察官聴取書・捜査報告・意見書・予審訊問調書・検察官諭告要旨・公判調書・上申書
菅波 三郎	検察官聴取書・検察官訊問調書・捜査報告・意見書・予審訊問調書・捜査調書・押収調書・捜査資料・公判調書
西田 税	警察官聴取書・憲兵聴取書・検察官聴取書・捜査報告・意見書・予審訊問調書・公判調書・手記「陳述補遺」
石原 広一郎	警察官聴取書・憲兵聴取書・捜査報告・意見書・予審訊問調書・公判調書・上申書・「最近の私の行動一覧表」
大川 周明	憲兵聴取書
石原 莞爾	送達証書・宣誓書・証人尋問調書（山口一太郎関係）
迫水 久常	証人尋問調書（丹生誠忠関係）

◆ 第二部 35 冊を収録（2021 年 5 月刊行予定）

* 収録内容は予告なく変更の可能性がございます。

好評発売中

近現代史料データベースは横断検索が可能です

オンライン版 矢部貞治関係文書 原本：政策研究大学院大学図書館所蔵 価格 ￥400,000（税別）

オンライン版 矢部貞治関係文書 補遺 原本：矢部家所蔵、衆議院憲政記念館寄託 価格 ￥270,000（税別）

有沢広巳旧蔵 オンライン版 社会政策・エネルギー政策関係資料集
 第一部 社会政策関係資料 価格 ￥450,000（税別）

オンライン版 三木武夫関係資料 全四部 価格 ￥2,400,000（税別）

オンライン版 大来佐武郎関係文書 日記・手帳・ノート 1936-1993 価格 ￥400,000（税別）

オンライン版 楠田實資料（佐藤栄作官邸文書） 全二部 価格 ￥800,000（税別）

オンライン版 大平正芳関係文書 価格 ￥400,000（税別）